

婦人の子死と生

第五卷
第五號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざることを。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

會告

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は一ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレール會へ向け何ヶ月分か纏めてお納めの上、申込まれると、雜誌は當會から無代價で御送附します。會員にならないで、たい雜誌だけ買つて御讀みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵税が一冊一錢づゝの割合です。

明治三十八年五月二日印刷
同 年五月五日發行

不許
複製

發行所 東京市麴町區飯田町四丁目十二番地
編輯者 有久龍
印刷所 東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
發行所 女子高等師範學校附屬幼稚園内
發行所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地
發賣所 金昌堂

大賣捌所 東京 東京堂 ● 同東海信文合資會社 ● 同北隆館

婦人と子ども 第五卷 第五號 目次

子ども

駱駝追ひ……………やまとの翁……………一
 お話大臣……………太田英隆譯……………二
 いそつぷの話……………かさな……………七
 貝の運動…………………………七
 動物の保護色…………………………一七

婦人と子ども

總會の辭……………高嶺會長……………二〇
 フレーベル先生の臨終……………東基吉……………三三
 家庭の躰……………太田龍東……………三七
 長命の法…………………………三四
 貞一の日記……………その母……………三六
 割烹……………石井泰次郎……………三六

婦人と親族法……………太田英隆……………三九

俳句端書集……………鹽野奇零……………四〇

山吹……………林天然……………四一

愛國婦人會總會の記……………紫波ゆかり子……………四二

九州地方の狀況……………久保やまと……………四三

流水日記……………小林雨峰……………四四

東京の手毬歌…………………………四五

紀州の手毬歌…………………………四六

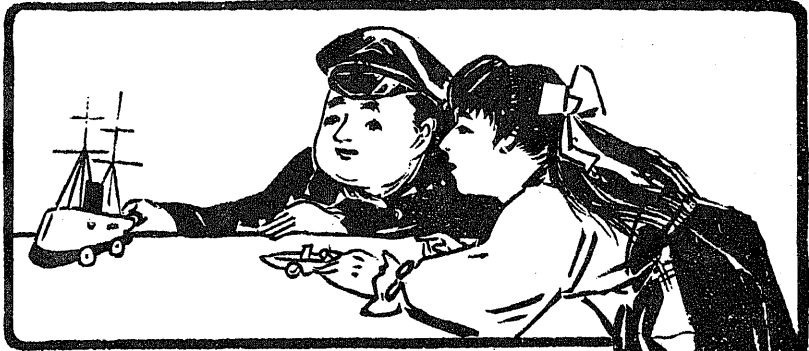
保育者のため

幼稚園に於ける自然研究……………平山ひさ……………四七

讀書の葉

日本魂…………………………四八

會報…………………………四九



もど子と人婦

號五第卷五第

駱駝追ひ

らっき

やまとの翁

大勢おほいせの中で、たった一人ひとりっ切り
の子供こどものアーは、他の人ひとと同おな
じ様に、喉のどが渴かいて堪たりません
でした。其晩そのばん、水筒すいびんに残のこって居ま
った最期さいごの一滴ひとしずくで、やっと唇くちびるを

潤うるほしたもので、さて明日あすは如何どうしたものと、心配こんぱいせずには居ゐられませんでした。

夜よるになると、アリーは、もう疲つかれ切きって仕舞しまって、「綿毛わたげ」の側そばに横よこになるのが嬉うれしくって、其儘そのますやくと眠ねむってしまひました。眠ねむったは眠ねむったが、まだ夜明よあけにもならない中うち、何かしら話わなし聲こゑがするので、不圖ふと目を覺さされました、何なんの話はなしか知らんと思おもって、耳みみを澄すまして聞いて居ゐると、隊商たいしやうの長かしらが、誰たれかに話はなして居ゐるので、此上このうへ水みづを見付みけることが出来できない上うへは、明日あすになったら、一匹いっぴの駱駝らくだを殺ころして、其胃袋そのゐぶくろの水みづでも飲のまねばならぬといいって居ゐるのでありました。

これは砂漠さばくの旅行りょぎんでは、時々ときときあることとして、駱駝らくだの胃袋ゐぶくろの中なかに

は、澤山な水がたまつて居る。一度に澤山水を飲んで、夫から何日もく水なしにやっけて行ける様に、駱駝の胃袋が出来て居るのであります。ですから、アリーは二人の話を聞いてもさほどには驚きもしませんでした。然し「あの子供の駱駝を殺さうじゃないか」と一人の隊商が言ひ出したのを聞いては、さすがのアリーも、吃驚して用心せずには居られませんでした。そこで、よくく氣を落ちつけて、じつと聞いて居ると、二人はこういつて居ます

「他の駱駝は、どれもこれもたちがよくつて、價も高いから、殺すのが惜しいや、夫に、あんな小さな子供が駱駝を持って居たからつて、別に何にもなりやしないじゃないか……あの子に取つて見た所が、喉が渴いて皆と一所に死んでしまふよりは、駱駝の殺

される方が餘っぽど得といふもんじゃない」

と、いって、とうく明日の朝いよく水が見付からん時は、アリの綿毛が殺されることに決まりました。これを聞いてから、アリのほうはもう眠り所の騒でない、つらくつらく胸が一杯になつて来た。が、夫と同時に、非常な勇氣と決心も出て來ました。そして自分で、「なーに、己の「綿毛」なんか殺されるもんかお父さんは、「綿毛」を連れて來いって、自分に言ひ付けたんだのに、自分獨りで、行つたらお父さん所へ行つて合はず顔がないじゃないか、よし〜」此上は、大勢と分れて、自分獨りで、路を探して行かうときめて、さて、大勢が寢鎮つたのを見計らつて、そつと、「綿毛」の首を叩きますと、「綿毛」は、ひよっこりと目を覺ましました。そこで

空虚くうこの袋ふくろだの水筒すいとうだのを脊中せななに結び付けて、駱駝らくだの脊せの上に跨またり、そつと合圖あひづをすると、駱駝らくだは忽たちまち起き上あって歩き出だしました。そしてトットトットトットと、軟なな砂すなの上うへを進まんで行ゆきます。夜中やちゆうなもんですから、空氣くうきは冷ひきつて、氣分きぶんもよい、一足ひとあし毎ごとに、アリーは氣きが強つよくなって來きます。空そらを見上みあると、一面ひとめんに星ほしが輝ひいて居ゐる、二人ふたりの道案内みちあんないといふのは、この外ほかにありませぬ。アリーは北極星ほくきょくせいのことも知しって居ゐれば、お日ひさんが沈しづむと、いつも西にしの空そらに顯あらはれる星ほしも心得こころえて居ゐますから、其星そのほしを右みぎに見みて行ゆけば必かならず南みなみに行いって居ゐると信しんじて居ゐます。さてだんく行く中ちゆうに、夜よが明あけました。お日ひさんは砂漠さぼくの端はしから出でて、だんく高たかくさし上あって來きました。頃ときはアリーも、だんく疲つかれて來きて、喉のどが渴かいて來きて、殆ほとん

と「綿毛」から落ち相にもなつてきました。さて、お父さんやお母さんのことを思ひ出すと同時に、勇氣を起して活潑にやつて行きます。

お日さんは今や眞中に昇つて來ました。丁度其時分アリーは遙の遠方に椰子樹の見える様に思ひました。が「綿毛」の目にも、夫が見えた様でした。何故かといふに、「綿毛」は、其時から、急に歩き方が早くなつたからです。

夫から、ほんの少しの時間が経つてから、アリーはとうく一つの草地に到着しました。これは、前に申した砂漠の島の島でありまして、丈の高い青々した草や、椰子樹が澤山生えて居て、今まで、砂の他には見る事が出來なんだ目には、どんなに奇麗だか知れ

ません。アリーはすぐ駱駝から跳び下りて、いきなり水漕りを探し出して、水筒にすくうては飲み、すくうては飲みして居ると、
「綿毛」は又長ひ首をさし出して、グイグイ貪り飲んで居ます。やける様に渴いた喉も潤ほされた後で、アリーと「綿毛」とは、大きな椰子樹の下に横になったが、疲れと安心とで、さも心地よく其儘眠って仕舞ひました。

眼が覺めると又アリーは非常に元氣ついて、そこいらの椰子樹から椰子の實をとって食べるも、「綿毛」は、草だの木葉などをむしって食べて居る、其中に、アリーは、其邊の草が大層ふみ荒されて居るのを見て、何でも、これは近い中に、他の隊商が此處で休憩したのに違ないと考へ出しました。それで又非常に元氣ついて、

急いで、駱駝に跳び乗って、又南へくと進ませて行きました。日は今西に沈みました。星は前の通りアリーを案内して居ます。然しだんく行くにつれて、お腹は空く元氣はなくなる、其中遙遠方に、隊商の焚いて居る火影が見えた時の、アリーの喜ひといつたらまあ、どうでしたらう。氣も心も勇んで、アリーは間もなく其處に着きました。そして綿毛から下りて、手綱を取って引張って参りまして、火の周圍に坐って居る、隊商の側へ来て、残らず今迄のお話をして、どうか仲間に加へてくれと頼みました、そしてお母さんから頂いたお金を出して、少し許りの食物を買ひました。

大勢の隊商は、アリーのお話を聞いて、悉皆感心して仕舞つて、

殊に、自分の駱駝を助けたアリーの勇氣を賞めないものはありませんでした。それだもんですから、喜んで仲間に入れて夕食を一所にして、いろくくと親切に世話をしてくれます。夕食が済んで仕舞ふと、アリーは、ほつく眠くなってきました、しばらくする中に、「綿毛」の側に横になったなりとうく眠って仕舞ひました。所が、丁度、アリーが楽しい夢を見て居る真最中、忽ちガランくといふ鈴の音で目を覺まされました、起きて見ると、これは南の方からやってきました、たつた今、こゝについた他の隊商でありました。そこで、今來た隊商等は、大勢をこいらに坐つて、夕食の出来るのを待つて居ると、其中の幾人か、アリーの眠つて居た火の側へやってきました、灰をかき起しては新らしい薪をさしくべて、

それからお米を煮る用意をして居ます。アリーは一度目を覺まして見て居ましたが、今や更に目を閉ぢて眠らうとした丁度其時、耳元に響いた聞きなれた聲に、又はと目を覺しました。耳を澄して立ち上つて、そして、今燃え上らうとする火の光が、其周圍に立つて居る駱駝追ひの顔を一々照らすのを待つて居ます。間もなく火が燃え上つた、そして丁度其上にかゝんで居た一人の駱駝追ひの顔を照らしたと思ふと、どうでせう、それはまがいもないアリーのお父さんでした。

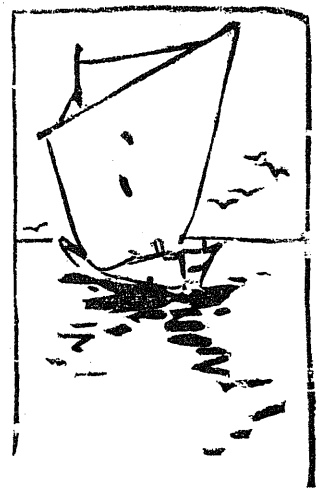
アリーのお父さんは、商賣先でアリーのくるのを待つて居ましたが、あんまり遅いので、屹度手書の間違でもあったのだらうと考へて、とうく一人で家に歸ることに決めて、折から、家の方へ

行く隊商たいしやうがありましたから、夫それと一所いっしょになつて、今丁度いまちやうどこゝまで來た所きたところでした。

私はこゝに、この二人ふたりが思おもひがけずに出遭でつた喜よろこや又また、お父ちちさんが、アリーがたつた一人ひとりで、さまゝくの危あやしい目めに出遭でつたお話をはなし聞いた時ときの満足まんぞくを、とても十分じゅうぶんにかき顯あらはすことが出來でません。それから、大切だいせつな綿毛わたげが、勇いさましい息子ひすこに依よつて助けたすけられた事こともお父ちちさんに取とつては大層たいそうな喜よろこびでした。

さて、明朝あくるあさになつて、大勢おほい一所いっしょに又また家うちの方に旅行りょぎんをつゞけました。皆みんなの中でアリーのお父ちちさん程ほど、嬉うれし相そとに見みえた人ひとは一人ひとりもありませんでした。

めでたしく



お話大臣 (つゞき)

太田英隆譯

○第三 魔術使ひ

花太郎は、王に對ひ

『王様よ、よく聞きなされ、今説き續く談柄は、昨日語り残したる文雄が妖怪に、今や殺されんとせる餘談でムります。』

と云ひて、昨日の話續きをいたすべくとり蒐り

ました。すると王は、待ち兼ねし様子にて『を、僂の話聞かうと思つて、昨日から時計ばかり見て、早く今日の來るのを待つてゐた、朕は今迄多くの人に、話はいろく聞いたが、僂のやうな話口調の旨いものは知らない、又昨日の談話も餘程面白うだ、早く彼の續きを話して呉れ。』

と奨められますから、花太郎は、まづ二ツ三ツ口咳しつゝ居直つて、言葉巧みに説き出しました。却説、かの妖怪が決心して氷の刃振り上げ、今や文雄の首は落やうとしました、この時一人の老翁が、一疋の牝鹿に乗つてこゝに飛んで参りました。老翁はこの有様を看まして、すぐその刃の下に行き

『まづお待ち下さい。甚麼な事情かは存じません

が、その刃をしばらくお納めなさつて下され。」

と取り纏るやうに頼みますと、妖怪は大音を上げ

「爾は何故邪魔するか。このものは、俺が弟子を多く殺せし罪があるから、今仇を討つのである、そこ逃げ。」

と又も斬らうとします。かの老翁は、吾れを忘れて妖怪の足下に滾び行き、身を伏して妖怪の足を口もて吸ふやうにして

「噫我が魔王よ、暫らく待ちたまへ、その忿怒を鎮めて俺が云ふ辭を聞きたまへ、俺はいまこの牝鹿の成立を委しく語つて聞かせます、この話は、世間にありふれた話とは異ひ、餘程珍らしきことであります。もしこれを聞きたまは、必然驚き怪しまないでありません、耳を聞んと申し玉は、この人の罪を宥して下さる。」

と兩路かけて云ひますと、妖怪は稍暫く首を傾けて考へてゐましたが、

「那麼では、甚麼話か知らないが、兎も角も話の終るまでは宥してやる。而して、性命は三分の一宥して、首を斬る所を、脚と手を斬つて之れに代へてやる。」

と申します。老翁はすぐ話にかゝりました。

魔王よ聞き玉へ、これなる鹿は私の妻で、います。この妻を嫁りましてから、十五年の光陰を経ちましたが、一人の子も出来ないのです。それで、一人の妾をおくことにしました。しばらくしますと玉の様な男子が生れましたから、嚙んで愛しますと、元來嫉妬の心深いこの妻は、その母と子を大層悪みましたのです。

不錯する内に、私は所用の爲め、半年ほど旅立

することになりました。妻は私の留守を幸ひ、今こそ日頃の怨恨を晴す折りと思つてか、我が子を人のゐない所に連れて行つて、かねて知つてゐた妖術を以て、小牛と化し農夫に養はしめ、猶飽さ足らないで、妾を同じ法で牝牛と化し、之れも農夫に與へました。

私は、這麼出來事のあるとは感知らず、久しぶりに家に歸つて、我が子の顔を見やうと思つて尋ねますと、妻は

『わの子は、二月前不圖家出せしまゝ、今に行衛は知れませんが、又母親は、それを苦に病んで死にました。』

と空涙を流して語ります。私はそれを誠に思つて、只その子に又會ふこともあらふかと那麽を頼みにしてゐました。

折しも恰度、回々教の大祭日になりましたから、牛を屠つて神様に供へやうと思つて、農夫の家から一疋の牝牛を求めました。その牝牛を屠らうといたしますと、牛は大層悲しき泣き聲を出して、涙を雨の如く流します。私は何だか、その様を見ると俄に悲しくなつて、什麼しても之を屠ることは出来ません。それで、農夫に命じて之を屠らせ其肉を見まするに、太く瘦せて食べられないのですから、之れを貧民に施して、又一匹の肥へた小牛を曳き來らせました。

今曳いて來た小牛は、私を見ると足下に纏はり、首を土地に摺り付けて、恰度子供戯れるやうなことをします。而してこの小牛が愛憐くなつて、什麼しても殺す氣になれませんが、他の牛と代へるやうに農夫に命じました。すると妻は、不興

氣に口を尖らして、

『夫は何故今日はそんな事ばかり宣つて、牛を屠らないのでありますか、そんなお氣の弱いことでは、何も出来ませんよ。』

と常になく責めますから、私は訝しと思ひました
が、さまで心に留めず、要らざること云ふなど叱りまして、犢牛を農夫へ連れて歸らしました。

翌朝になりますと、昨日の農夫が遣つて参りまして、密々に申上げたき要があるから、すぐ來て下されと申しますので、私は推参しました。すると彼の農夫は、聲低そめて云ふには

『旦那、私には御承知の通り、今春十六になつた娘がゝいます。この娘は何所から教を受けましたものか、不思議な術を覺へまして、昨日旦那の御宅から曳いて歸りました、あの犢牛は人間の化し

たのだと云ふことを知りました。』

これを聞いた老翁は、不思議さうな顔つきで『何と妙なこともあるものだね。併し私には理由が解らないが、其仔細を聞かしては呉れまいか。』と申しますと、農夫は

『それをお話しいたさうと存じまして、お招きしたのでゝいますから、静にお聞きを願ひます。エヘン、恙うなのでゝいます。昨日の犢牛は旦那の最愛の御息でありまして、奥様が惡み嫌ふの餘り、魔術を以て化したのでゝいます。又已に屠つた彼の牝牛は、御息の母親であります、これと同じ術で、世にも淺ましき姿と變らせ、現世からなる畜生道に陥しいれたることを、我が娘が知り得たのでゝいます。』

老翁は右の話を語り尚云ひますには、我が魔王よ、私が農夫よりこの事を聞いたときの驚き、否喜びはどの位であつたでせう、お察し下さい。私はこの事を聞や否急いで、娘の静枝に向つて、

『静枝さん、貴女は我が子息を再び、人間に化する術を知つてゐますか、知るなら什麼か元の人間にして下さい。』

掌を合せて頼めば、娘は笑ひながら

『卑妾は、その術を學びましたから、人間に化するのほすぐ出來ますよ、それでは早速蒐りませう。』

と云つて魔術にかゝりました。登下娘は、神酒徳利に酒を盛りたるを持つて來て、咒文を三回唱へ、次に犢牛に向ひ、

『嗚呼犢牛よ、汝は元來人間に創造れながら、僅

か魔術の爲めに、其形を犢牛と化せられたものである。今妾は、天帝より許されて、汝を復の人間となす。』

と云ひながら、徳利の酒を犢牛に注ぎかけますと、不思議にも犢牛は、見る間に元の人間になりました。

この時の私の喜びは、天にも登る心地して小踊りいたしました。その喜びは、とても只今口には説べることはできません。

その後、我が子息と娘の静枝とを、夫婦とさせて、その婚姻の式を行ふときに、娘は魔術を以て、我が妻を牝鹿と化して、今までの罪を罰しました。この牝鹿は、即ち私の妻でゐます。

さうしまして、新夫婦は和睦しく暮してゐましたが、新婦は不圖疾病の爲めに死くなりました爲

め、子息は、それを悲しみ、遂に何所ともなく家出をせしま、今に踪蹟が知れないのでういます、それでももしや逢ふこともあらうかと思ひまして、諸國を廻つて居ります内、今日不圖この場に出逢つた次第であります。

今迄語りましたことは、何んと珍らしい物語でムいませうと、恐々ながら妖怪の機嫌什麼と伺ひますと、妖怪は、餘程の話好と見へまして、

『僮の話は中々面白かつたから、約束通りこの人の罪の三分の一を宥してやる。』

と申します。この時老翁は、其罪を全体宥すやうにと頼みましたが、少しも聞入れず、

『これより少しも罪は宥せない、無益な口出すな、さあ僮の腕を先きに斬るから、腕を出せ。』

と云ひながら、太刀を振上げて文雄の腕を斬りか

けました。

この時花太郎は、今日はこれで休みますと云つて、王様に一禮して下りました。

いそぶの話

人殺し

人殺をした人が、追手から追いかけられて、ナイル河の岸まで逃げて来ると、そこに一匹の獅子が居たので、これは耐らぬと、木によぢ昇つた。すると、上の枝に大きな蛇が居たから、こりや叶はぬと云ふので、いきなり下の河へ跳び込んだ。所が、河には鰐が居て、たゞ一口にがぶりとのんで仕舞つた。人殺をする様な人は、地の上でも、空中でも、水の中でも助かりつこなしたといふ話

獅子と鰐

一羽の鷲が、どこからか逃げて来て、獅子に攻守同盟を申し込んだ。すると、獅子のいふのが面白

い。
「夫には我輩も反對はしないさ。然し、君が十分信用が出来るかどうかを知りたいものだね、我輩は、自分の勝手な時には、どんな約束もふりすて、飛んで仕舞ふ様な人を友達として信用することが出来ないからね」

信用する前には試みよといふことがある、鷲といへば、今日日本と戦争して居る國の外交も思ひ出されません。獅子の言ふことは賢いじやありませんか。

真理と旅人

一人の旅人が砂漠を旅行して居て、一人の女に遇ひました、

旅人「あなたの名前は何といふんですか

女「私は、真理といふものです。

旅人「あなたは何故、市街を出てたつた一人、こんな淋しい所に居るのですか

女「始め、虚偽といふもの、なかつた時は、私も市街に居りましたが、今では市街一杯虚偽が廣がつて来ましたから、私はこゝへ出て参りました。

獅子と狐

狐が、獅子の家來になるといふ約束で、獅子の仲間に入りました。そこで、各自の性質と力とに依つて適當した仕事を受け持つて働くことになつた。狐が、餌を見付けて報告すると、獅子が一跳びに跳びかゝつて捕へるといふ風に。所が、狐は、獅子がいつも〴〵餌をくわへては持つて行くのが、嫉ましくなつて来て、今度からは、餌を見付けるはいやだ、自分で見付けて自分で捕へるこ

とにしようと言ひ出した。そこで翌日、罅の中に這入つて行つて、小羊を一匹盗み出して來ようとしたが、忽ち、番人と犬とに見付かつて殺された。

貝の運動

さいえの貝でも、其他の貝でもよい。貝の蓋を取つて、大きな井に酢を入れて、其中に浮かすと、貝はぐる／＼獨り手に回轉つて運動します。これは貝の石灰質が酸に溶解けるからです。貝とは違ひますが、樟腦の塊を水に浮かして、火を付けると、くる／＼水中を回りながら美しい青い火が燃えます。

動物の保護色

大抵の動物は敵から、よいに目つからないように外界の色と同じよゝな色をしています。これは自然か動物を保護する爲に出來て居るのですから、保護色といひます。草むらにすんで居る虫類が、多くは草と同じ色をして居るのも、其類です。又所によつては、時によつて、動物が色をかへて行きます。たとへば、北の方の國では、夏頃、普通の色の兎が、冬になつて雪が降る時分になると、雪とよく似た眞白い色に變ります。然し黒鳩公の頭の毛が、滿洲の此冬の戦から、眞白くなつたのは、鳩の保護色ではありませぬ。

婦人の子ども



總會の辭

高嶺會長

世の中には、極めて必要な仕事であつて、然も其仕事に對する骨所が、世間の人の目を引く程派手でないものが甚だ多い。教育の事業も其一であるが、其中別して就學前の幼児を保育することが、最も其適例であらう。

人間の習慣は善惡共に七歳以下の幼年時代に於て、多く形成せらるゝといふことは、フレーベル氏の曰ふを待たないでも、心理學の一端を伺ひ、少しく思慮を費したる人は誰しも大に然りと思ふ事であらう。

此幼稚の時代の教育の仕方依つて、人間の將來に至大の影響を及ぼし、善悪二途の何れに傾くか、其傾向は殆んど此時代に定まるといふことも多くの教育家の考へて居る説である。幼稚の教育はこれ程大切な事業ではあるが、然も教育の最下の段階に位して居る所からして、其事業に盡す功績、價値といふものは、容易に人から認められないで、幼稚の教育は、教育事業の中でも殊に目立たない事になつて居る。

従つて之を目的とする幼稚園の教師の仕事、又其集會たる本會の如きも、世間からは随分目立たない役、目立たない會と見られて居る、然しながら非常に人目をひく様な事業は構はないで置いて、やらうといふ人が幾らもある。而して、其様な事許りでは、實際社會の眞の發達進歩は出来ない。やる人の少い事業に當り一身を以て犠牲となる人が、澤山出來て始めて、眞に基礎のある根底の固い進歩が期せられるのであるから、今日此の如き業を取らるゝ人達が互に寄つて獎勵し合ひ、研究し合ふ爲めの本會の如きは、益々必要になつて來る。

今や我國運未曾有の發達を來したるにつきては、教育の各方面とも、益々發達せしめなければならぬ。而して一面に於て幼稚園の如きも歐米各國に在りては、近年益々隆運に向ひ、我國に於ても漸次隆盛に向ひつゝあるが如しといへども、然も我國に在つては、保姆の養成の如き、保育の方法の如き、學校教育と幼稚園保育と、又家庭教育と幼稚園保育との關係の如き、尙多くの解決せざるべからざる問題を有

して居る。而して他の一面に於ては近來漸く家庭教育に向つて少しく心を傾くるに至つたは、甚だ喜ぶべき現象であつて、固より一般教育者の考慮すべき問題なれども、特に幼児保育の方法を研究し、其普及發達を目的とする本會の如きは最も直接の關係ある事と思ひます。本會の發達固より遅々たるが如しといへども、會員の數、已に、一千人に垂んとして居ますれば、本會の基礎も漸く、固くなつた事と信ぜられる。切に望む所は、會員諸子、愈て研究努力して本會の任務を盡されん事である。

フレーベル先生の臨終

東 基 吉

冬の終から先生の健康が聊か勝れないといふことであつた。夫にしても先生の事業は格別の障りもなく、先生の意氣は例に由つて盛であつた。明くる年は千八百五十二年で、其四月の二十一日には、先生の第七十回誕生日が非常な盛會に於て祝はれた。同じ月の末、ゴタの教育會から招待せられて、之にも出席したが、この時先生は餘程満足の様子で、先生の意見が、だん／＼教員社會に注意せられる様になつた事を喜んで居られた。

然るに其年の六月六日、先生には遂に最期の病魔の襲撃に出遭はれたのである。先生も今度こそは、到底恢復の望なしと自覺せられた様子であつた。然し、病床に居られる間、喜と平和とは瞬時も先生を

離れない、絶えず微笑を浮べては夫人やお醫者と樂しげに語られて居る。何事も樂し相に見えたが、美しい花を送られた時の喜は又格別であつた。ある時のこと、先生の曰はれるには

「私は花を愛する、人を愛する、子供を愛する、神を愛する、私は總べてを愛する。」

たい先生の言葉の上丈けでない、實に先生の容貌の上に最も高い平和が顯はれて居る、最も樂しい辭世が顯はれて居る。先生の精神は如何にも、其理想界に進み行くを喜んで居るかの様に見える。去られる前の日曜日のことであつた。一人の可愛い女の子が先生にといつて一束の花を持つて來た時、先生は非常な喜で迎へて、叶はぬ手を無理にさしのべて、其子を引きよせ、その小さな手を自身の唇に當てられたのであつた。先生の花に對する心遣は次の言葉でも分る

どうか私の花を氣を付けて下さい、草も頼む、私が之から學び得た所は實に多いのである

と曰はれた。そして今はの時にも同じことをくり返された。窓は時々開けて置く様にとのことで、そして、外の自然の様を見られた時は、先生の顔は一入さえ渡つた、そしてこんなことを仰せられる

「ア、何と清らかな生々した自然でないか

時には又

「いつまでも我に親愛なれ、我は死ぬるのでない、之から後も汝の中に逍遙するのである」

そして、カイルハウで先生と一所に働かれた友達等に對しては、どうか一致と調和と平和とを保つて行

く様に、模範的の生活を送る様に、一家族と同じく一致の骨折をする様にと、再三再四訓誡せられ周囲の人々には、先生の事業に同情を表せられた事に對して、重ね々感謝の意を顯はされた。

かゝる間に、此月の二十一日は來た。病床に付かれてかれこれ二週間目の夕刻、この日は容體が殊更危く居らせられた。一杯の葡萄酒をとのことで唇を濕はされたが、臨終はこの時から漸く追つた。うつらうつらと閉ぢられた兩眼は、かすかに開かれて、親友ミツデンドルフの顔を今一度眺めたと思ふと、呼吸が漸く忙はしくなつて、其夕の七時頃、二度許り長い呼吸をせられた儘、先生の眼は永遠に閉ぢられたのである。

一生の間片時も一身の利益に思ひ到らず、全力を人道と幼子の幸福との爲に犠牲にせられたこの尊むべき偉人の臨終は、げに些の惱も悶もなく、この様に平和で安靜であつた。

この時側に侍つた先生の親友の一人は、沈痛の語調で次の様にいはれた。

「先生の靈魂は、平和と愛と感謝とを以て、例令ば、幼子の父母の膝下に歸る様に、其原に歸られた。夕日の西に沈む景色は先生が常に愛せられた所で、清らけき夏の夕暮の空は、度々我を忘れて眺められたのであつたが、先生の臨終は、丁度夕日の西に沈んだ様なものだ。先生の存在の光は恰も太陽の様に、普く我等の上を照された。今や夕日の西山に沈んだ様に、先生の光も我等の眼から離れた。然も再び我等の間に歸らるゝ事は尙太陽の每朝東の空に顯はるゝが如きものと私は信ずる。永久の生命を信じて、

私は、悲歎の中にも喜を感じる。今は死も歎きも私から消え去つた。自然界とあれ程親まれた我が先生、自然の教を聞き、一つの眞を以て自然の法則に従はれた先生は今や愛兒の様に自然の懷に抱かれた。自然は確に先生の愛に報ひるであらう。病床に在られた間の先生の静かさは丁度小羊の様であつた。一言半句の苦痛の聲も不平の訴へも聞かれなかつた。先生は、實に忠實な自然の子であつた、そして自然は實に、慈愛の母であつた。かくて今や自然は其懷に先生を取り去つたのである。

言ひ終つて、此人は熱心な祈禱を捧げた。

さて葬儀の日となつた。さまざまの花はいやが上にも先生の棺を飾つて居る。夫人と生徒との手に由つて出來た月桂冠は病床に弔されて居る。人々は今一度先生の面影を拜せんと周圍に集つた。聊かの苦痛の痕跡も面影には留めて居ない。清き熱心と内心の喜と非常な柔和とは變り果てた姿の上にも明に顯はれて居る。唇は幽かに開かれて居て其様子は例令ば未來の世の秘密を語られて居るかとも思はれる。言ひ知れぬ神々しさと清けさとは廣くもない此一室に充ち渡つた。此瞬間に於ける先生の無言の説教は人々の心を打つて無限の感動を與へた。やがて棺は廣場に移された。數知れぬ幼子等の捧げた花束の夥しいこと。此日集つた者は之等の幼子の他に教師といはれ保母といはるゝ人々を始め其他知るも知らぬも、遠近の別なく、何れも此壯嚴の式に列せんとて參集した。かくて讚美歌の合唱と共に葬式はシユワイナ村の寺院に向け徐かに行進を始めたのである。

折節、雨は車軸の如く風さへ加はつて凄しい天氣となつた。この時葬儀を司どる牧師リユツケルトは、牧師に似つかはしい謹嚴の句調で

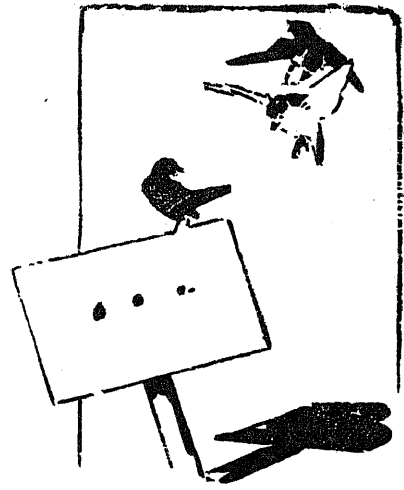
「先生は最後の旅行すら尙嵐の中を通られるのである」

といはれた。

寺院に着いてから牧師は更に會葬者の前に立つて、述べられた一節は次の如くであつた。

「一生の務を成し遂げて安らげく眠に就かれた靈魂は茲に横はつて居る。先生は幼子と人道の爲に全身を捧げられた。大いなる希望をもたれたが今や其希望は充たされたのである

かくて讚美と祈禱との間に棺は墓に下された。折柄雲散つて空晴れ、太陽は、隈なく墓内を照らし始めた、人々は更に夥しき花束を投げ込んだ。同時に寺院の鐘は無量の感慨を與へるべく響き渡り、近く前面に屹立せるリーベンスタインの古城もさながら、此偉人の長逝を痛むかの様に、暮れ行く春の霞に其半身を隠した。



家庭のしつけ

太田龍東

家庭は、我が帝國第二の相續者を出す本家本元である。この本家本元たる家庭に於ける躰のよしわしに因つて、相續者の人物如何に大なる關係を有するものであるから、家庭の任務中、躰は最も大切なものである。

學校教育でも家庭教育でも、この躰は最も大切なものであるが、又これほど六ヶ敷ものはなからうと思ふ、彼の植木屋が、庭園の松の木一本育てるのさへ、枝を曲げたり直ぐにしたり、或は肥料の梅鹽或は日光の加減、なんとかかとか云つて其朝夕の骨折は一通ではない。若し斯んなにして培養しなかつたら、草木一本でも碌なものにはならないのだから、況して人間を育てるには仲々骨の折れたもので、この骨の折りやうで、曲つた人間でも直ぐな人間でも自由になるのである。

元人の性は善であるか悪であるかと云ふことは、西洋に於ても種々の説があり、又東洋に於ても、告子の如きは、「性は杞柳の如く又湍水の如し、本善惡に分るゝ事なし、只心外の道たる義に依つて薰陶せられて善となる」と云ひ、孟子は之れに

對へて「杞柳の固有性あるが如く流水にも又固有性あり、人にも又仁義をなすの固有性あり、而してこの固有性は性なり、人の有性たる所以を以て何ぞ人性と他物との區別するあらん、人には他の万物と異りたる固有性あるあり。この固有性即ち善性なり。」と云つてゐる。が、今こゝには性其もの、研究ではないから、深く述べる必要もないが、兎に角、人は生れると、善にも惡に染まる心のあるものだと言ふことが知ればよい。こゝが墨子の所謂白い糸のやうなもので、染めやう一つで以て、白とも赤とも黒ともなる大切なきはどい所である。

一

實に小兒は純白無垢なもので、耳に聞いたり目に見たり眞似をしたりして種々なことを知るものだから、墓場の傍に住めば葬禮を出す眞似をした

り、商買人の側に住めば商人の物賣るさまをしたり、學校近隣に住めば生徒の眞似をする様になる。居所の撰み方も養育上大に注意せねばならない。余の知れる人に非常に釣の好きな人で、東京深川の八幡宮の近隣に住んでゐる人がある。其人の子で今年七歳になるのが、時々父に従つて釣に行つて、時には釣竿を持つて魚の一疋位釣ることがあるので、釣の爲やうは覺えてゐる。ある時のこと、公園内の池に大きな鯉が澤山をるのを見て、例の釣道具を出し、獨りで釣に行つたものと見へ、大きな鯉を一尾さげて歸つて來た、よく聞いて見ると全く公園の鯉を釣つたことが知れて、親は其後始末に大に閉口したと云ふことを聞いた。又ある手の友人の家に六歳ほどの女の子がある。この友人は、書物に書入れをよくする人であるが、あ

る時蟹江博士の西洋哲學士を買求め、一度も見ずして机の上(うへ)にをき、學校に行きし後にて彼の少女が書入の眞似をしたものと見へ、書物を開いて見るとサア大變、どこもかも眞黒で丸で草紙同様。

こんな風に、小兒は何んでも猿の様に人眞似するものであるから、親は充分注意して、惡い眞似を爲せない様にせぬばならぬ。併し親は、口で異見するばかりで、自分が惡い行をしては駄目です。予が知人の細君に、極く買喰ひの好きな人があつて、自分は一日に四五度は必ず、菓子とか焼芋とかを買つて食ひながら、十二と九歳との小兒があつて之れが物を乞ふと、「人は間食は毒です、買喰ひする者は大馬鹿です」と異見するのを見た。自分が手本を示してをいて、小兒の躰を八ヶ間敷云つても、それはとても行はれぬことである。

そうして躰をするのに、ある程度まではどうか知ぬが、嘘を吐くことは大に慎むべきことである。彼のお化が出るなど云つて、夜一人で便所にも行けない様なことにするのも、親が嘘を吐いて憶病者としたので、決して其子の小膽ばかりではない。予の今居る隣家に五歳の男の子がある。この子は至つて腕白で少しの事に驚くやうな子ではないが、一度大層機嫌を失して如何に云つても聞入れないで泣いて地鞆踏ふんで殆んど皆が持て餘した。時に恰度越後獅子が、笛を吹いて太鼓を鳴してやつて來た。それで母親は、その小兒を抱へて獅子の前行き、「お獅子や、この子を噛んで遣つて下さいな」と云つたら、其子は獅子の顔を見るときぐ泣は止んで、青い顔色になつて母の懷中に首を入れた。其時は獅子の効能があつて好かつた

が、其後は、笛の音や太鼓の音が聞へると大變、大きな聲で泣いて押し入の中に飛んで這ると云ふさはき。それがすぐ泣を止めればよいが、仲々以て一通の手段では機嫌が直らないから、今では大に困つてゐる。何時かも、母親が其子を背負つて、親類に御使に行く途中、向ふから救世軍が太鼓や手風琴を鳴して軍歌を遣つて來た。すると小兒は先日の獅子と間違へて、例の脊中で地鞠踏を初め、母親は一方ならぬ迷惑したと云ふことである。

それだから、小兒に言葉一つ云ふにも注意せねばならぬ。彼の孟母が、孟子に獸肉を與へて自分の嘘を誠にしたと云ふが如きを見ても、如何に孟母が養育に注意したかは察することが出来る。孟子が、聖賢と尊はれるに至つたのも、この賢母の賜と云はねばならぬ。世の母親たるものも、よ

くこの邊を心得て育兒されるがよい。それであるのに、社會の中流以上に位せる人の中に、子供の前で大酒を呑んで、見るに見られぬ舉動なし、后で小供に反問されると、あれは酒に酔つたから、と酒に負せて少しも耻づる色なきに至つては、言語同斷も甚しいではないか。予は斯の如き人を見ると、頭から嘔でもかけて遣りたい様な氣がする。まだ甚たしいのは、好い年をしてゐて、妾を置いて毎晩酒を呑み、自分の子供の前にならべて、妾と巫山戯狂ふて見せるなどに至つては、實に例令やうがないではないか。よく知人の例を引くやうだが、こうなると言はずにはおれない性質。其日まで日誌に附けてゐるから分るが、今より五年前、即ち明治三十四年六月十八日であつた。淺草の大門口入つて夜店を見てゐると、予の知人で銀行員

某が、其子で十五才になる娘と十二才になる男子とを連れて散歩してゐるのに出會た。「今晚は僕が行く所に一所に來給へ」と云ふので予は御供した。施て料理屋に上つて飲食をした所が、先生少し酩酊しだし、車夫に予等の一行を命じて妙な所に連れて行つた。予はこの時先方に着くとすぐ其儘逃げて歸つたことがある。今思ふとこの人の家庭が實に思ひやられる。

世が進化するに連れて道徳が進むかは知らないが、近時世の風儀が亂れて來るのも亦明である。之れは社會が悪いのだと云ふ人があるが、その社會は一家の集合したものであるから、分子から正さねば團體の矯正は行はれない。大學に「其國を治めんと欲する者は先づ其家を齊ふ、其家を齊へんと欲する者は先づ其身を修む云々とあるのは、

この所を言つたもので、其社會國家の風儀を正ふするには、其家庭からして之れを修めねばならぬ。

右述べたやうに、家庭が荒れに荒れ果て、小兒の教育どころか、自分の身が修まらないから躑躅などは思ひもよらぬ所である、我國は中流以上に於て風儀が悪いのを見る。之れには種々原因もあらふが、教育の無いくせに金の威光で鼻を高くする實業家が其原ではあるまいかと思ふ。日本の實業家には道徳思想は夫れは幼稚なもので、彼の銀行會社員には、皆までではそうでもなからふが、多くは教育に乏しく、道徳などは眼中に置かぬらしい。今少し道徳を進歩させて、家庭をして兒童の羞惡廉恥心を形作るやうにせねば、社會の風儀は、とても矯正されべき見込はない。

學校でいくら教員が汗水を垂らして修身の話を
 して聞かしても、學校から歸つて家庭に入れば、
 正反對のことをして見せて、學校の教を水泡に歸
 せしむるやうなことでは何にもならない。予は茲
 に今の學校を全然よいとばかりは云はないが、害
 になるやうなことは決してない。それだから、家
 庭に於て少し注意すれば、學校と相俟つて教育を
 完からしむることが出来る。そこで、學校と家庭
 の連絡は大に必要であるが、此點は都會ほど實行
 されてゐないのは、予の最も遺憾とする所である。
 この路に當つてゐる人に、この道を講ずる者が少
 いのは如何なる理由であらふか、教育は机の上の
 議論ばかりでは實際得て期することは出来ないの
 である。それだから、往々家庭と學校との間に意志
 の不通を來して、互に變な思をするとは少なく

ない。この點は家庭よりも學校が冷淡な所がな
 いでもない。これ等の點は、又時を得て他日述べ
 るとして、父兄たちが、小兒を學校に托してそれ
 で育兒の事を安心しては大間違。學校は其方法を
 授けるに過ぎなくて、之れを訓練するのは家庭に
 あるのだ。學校は訓練を放任する譯ではないが。
 時間に制限があつてとても完全には行かない。だ
 から家庭で充分訓練せねば、學校の教育も旨く功
 を奏せないことになる。
 然るに、父兄の口からして、「この兒は學校に行
 き出してから大層行儀が悪くなつた」など、云ふ
 のを耳にするが、それでは學校は不行儀者を養成
 する所のやうで、大變悪者になつて了まふ。前に
 述べた様に、學校に入れたら自分の内でも養育に
 注意して、共々に之れを勤めたならば、決して前

より悪くなることはない。學校に入れたが最后、家庭の教育は止めて了まふから、そんな結果を來すのに相違ない。

これは中等教育の方になるが、予はこんな話を聞いたことがある。ある田舎の人が、その娘を東京の女學校に入れた。親では五年も女學校で勉強させたから、學問は云ふに及ばず、裁縫でも生花でも育兒でも、其他家事のことは万端昇事に出來るだらうと思つてゐた。すると先生卒業して錦衣歸郷と相成つた。所が親たちは案内。成るほど學問は出來るだらふ、横文字もペラ／＼讀むし、日本文もコテ／＼綴るが、裁縫は田舎で習つた姉の方が旨い、家事の方は下女がよほど上手だ。これに至つて父君曰く、「女なんか深く勉強さしても何にもならない、理くつばかり上手になつて、

羽織一つ碌に縫へない。」と、世の中にはこんな人が澤山あるに相違ない。女學校に入れたら何んでも出來など、は以ての外である。女學校を出たら、それからは父母の任にあるから、この任を旨く果さないと、今迄の苦心も水の泡となることがある。親心として、自分の愛子を悪く育てふと思ふ者は一人もなからう、皆立派な人に仕立てたいに相違ない。が、只思つたばかりではよくは育たないから、充分注意に注意を加へ、天晴な人を養成せねばならぬ。茲に一つ注意して置くことがある。可愛がるのはよいが、無茶苦茶に可愛がり過ぎてはよくない。之れは世間に間々ある例で、一人娘とか一人息子とかである、子の好きなやうにして遣つて、終りには仕方ない人間にして、了つて先祖傳來の財物は飛んで人の所有となり、頼みに

頼んだ子供は何所にや逐天し。頭は白雪を戴き腰は梓の弓となり、住むに家なく食ふにものなく、養ひくれる人もなくなると云ふやうな例は、随分耳にせんでもない。皆この人等は、子を養てるに其大切な躰の方法を過つたものと言はねばならぬ。

要は只、兒童を養育するには、學校教育のみに放任せず、又愛に溺れずして旨く躰し、以て社會の一員たるに恥ぢない人間を陶冶するまでのこと。

長命法

長生の秘訣として讀賣新聞に左の長壽者の實驗を記載したり

近刊のクランドマガジン雑誌は知名の士にして

八十歳以上の高齡に達したる人々の姓名を掲げ併せて其の日常生活の方法を略記せり而して斯は疑ひもなく長命を希望する人々に向つては一の新知識たるを失はざる可しと。

グウイドル卿、九十五歳、禁煙、室外運動、萬事に節制。

グリムソルブ卿、八十八歳、禁煙、節制。

ネルソン卿、八十二歳、禁煙、夙起、節制、醫藥を服用せざること。

ダブリユー、ハギンス男爵、八十一歳、禁煙、少量の肉食に牛乳。

ダブリユー、エル、ドリンククウヤーター男爵、九十二歳、禁煙、屋外運動、七時間睡眠。

マイヨル教授、八十一歳、禁煙、嚴格なる菜食、運動皆無、一日の飲食費二片、朝は四時に起褥。

十二歳、禁煙、屋外運動、七時間睡眠。

マイヨル教授、八十一歳、禁煙、嚴格なる菜食、運動皆無、一日の飲食費二片、朝は四時に起褥。

運動皆無、一日の飲食費二片、朝は四時に起褥。

運動皆無、一日の飲食費二片、朝は四時に起褥。

視力健全。

デヨーヂ、エス、キース博士、八十六歳、少量の喫煙及び飲酒、少量の肉、及び魚肉食、多量の牛乳。

ダブリエー、ピ、フリス、八十六歳、一日に二食、葉巻煙草三本、ウイスキー酒茶一杯、規則正しき運動。

エツチ、ヂー、デウイス、八十二歳、禁煙、三回の食事を充分にすること、規則正しき運動。

エフ、エス、バーデン男爵、八十六歳、七時間睡眠、少量の肉食及び葡萄酒。

以上列擧したる高齢者中の多数は禁煙者なりといふことは注意すべきことなりとす。

尙「家庭」に百年長壽法と題して國の方法を記載したり

英國の大醫サー、ゼームスソーヤー氏の百年長壽法は、大要左の如し、但し冷水浴や牛乳に對する見解一寸異れり、

- 一、八時間睡眠の履行
- 一、右脇を下にして眠るべし
- 一、風引かぬ様而も寢室の窓を終夜開くべし
- 一、寢臺を壁と密接せしめてはならぬ
- 一、朝の冷水浴は必ず體温と同温度以上たるべし
- 一、朝食前の運動
- 一、食物は分量を少なく調理を吟味せよ
- 一、成年以上の者は牛乳を飲む勿れ
- 一、酒類を飲むな
- 一、毎日常氣よき場所に運動せよ
- 一、猫や犬と同室に住む可からず

一、出來得る限り田園生活をなせ

一、休暇は長く續けるな併し度々すべし

一、欲望を制限し忿怒を避けよ

一、三個のDを避けよ、水を飲むと Drinking-

Water 濕地 Damp 下水 Drains

貞一の日記 (明治卅六年五月一日年男兒) (承前)

その母

三月十五日 水鼻少し出で、咳も時々出づ、午後

四時頃、咽喉かゆきか、エー〜といひ居りし

が、少しく水を吐く、

今日は、父の誕生日なれば、御祝ひあり、父よ

り、皆々へいろ〜の物を贈られ、貞一は、風

船をもろふ夕飯後父に抱かれ、ピアノの室に行

き、母は面白き曲を弾く、貞一にはコチロンで

なければ、氣に入らぬなり、エー〜といつて

やめさす、瀛車〜はしれの歌をひけば、シユ

ツ〜といふ、瀛車のつもりなり、

朝 ミルクトースト、牛乳一〇〇瓦

晝 粥二椀、魚あまだい。

ふやつ ミルクトースト、牛乳七五瓦

夕 粥二椀、あまだい

三月廿日 朝、床の中にて、マンマ〜といふ故

母アイヨと答へしに、おもしろがりて、アイヨ

〜と、真似す、此頃は、御辭儀、少し上手に

なり、父母學校より歸りて、只今といへば、腰

を變に曲げ、頭を一寸下げる様子可笑し、

食卓の上へ上げてやりしに、夫が大變氣に入り

て、それよりはしきりに、上げよとせがんで、

上げてもらひ、また下せといつては、おろして

もらつて、居つたのが、後には獨りで、ずん／＼上り下りする様になる。

三月廿一日 父の按摩させるを見、不思議そうに、按摩さんの顔を、眺居りしが、コー／＼といふ、眼を閉ぢたるを見て、眠りしものと思ひしなり。

三月廿三日 此頃は、母の不在中は、中々大人しく、母歸れば、あまへて、一寸しても泣き、又ひつくりかへりて、あばれる。

三月廿五日 今日例よりは、元氣なき様なりしも、母學校より、歸りて教は、マヒ／＼、トンボをして、室の中を、ぐる／＼まわり、眼がまわつて、倒れそうになるのをよろこぶ、

昨日よりは咳の數、多くなりたり。

三月廿六日 小原先生の許に行く、体量減じ居れり、風邪の爲めならんと、九一六〇、〇瓦

三月卅一日 父學校へ出る時、また歸る時、皆玄關に出でても、ばわや居らぬ時は、ばわ／＼と呼ぶ、御客のある時も全じ

四月一日 咳は余程よろし

夕刻おもちや箱より、おもちやを一個づゝ、出してはならべ居りしが、鉛の時計を、持ちて耳におしあて、音の出ぬを、不思議そうに、幾度も／＼、聞き居たり、

今迄母、學校に行く時、あとをおふて泣く故、かくれて出で行きしが、かくては情忌の心を、抱かす恐あれば、本日よりは泣いてもかまわずいとまをつけて出で行く事にす、

四月二日 夕方食卓の上へ、兩手を出して、ピヤノ弾く眞似して、遊び居りしが、何を思ひしか、急に眼をとぢて、すまして弾く、

咳昨日より多し、

割烹

鹿尾藻の白わへの拵方

石井泰次郎

砂糖	みりん酒	堅魚煎汁	醬油	豆麩	醬油	みりん酒	砂糖	堅魚煎汁	乾鹿尾藻
六	四	八	五	四	九	四	二十	二	二十
匁	勺	勺	勺	筒	勺	勺	匁	合	匁

ひじき藻を、水に暫く漬けてやわらげ置き、柔らかになりたる時、取上げて水を切て、鍋に湯を入れたるに、入れて二十分間湯煮して、上の泡をすくひ去りて、取上げて湯を切りて、別の鍋に、だし、さたう、みりんを入れ、其中へひじきを入れて、醬油を入れて、煮ること二十分間して、鍋をかるして、ざるにひじきを取わけおくべし、

とうふを布に包みてしぼりて、搦盆に入れて、すりて其中へ、醬油、だし、みりん、砂糖を合せて、鍋に入れて煮たるものをつぎ入れて、

右のひじきを、入れて、箸にてかきあはせおきて、皿にもりて出すべし、

○ひじきにかぎらず、何にても、このわりにてあへて、つくりこゝろむべし、

これはたやすき日用惣菜の仕方なれども、たい見

るときは、何ともなき料理法なれど、石井式教授法の筆記として見る時は、なにかことなるところあるべし

婦人と親族法

太田英隆

第二節 親族の區別

親族の區別は何人に限らず是非之れを知りてく
の必要あるを以て、稍詳しく説明しますから、複
雑で了解し難いですが、少しく注意してお読み
下されば解し得られませう、

第一、血族

血族と云ひますのは、血統が共同の始祖から出
て相連結してゐる者を云ひます。血族を親族と申
しますのは申すまでもないやうですが、若し血の

連結してゐるの故を以て、無限に親族としたなら
ば、路傍の他人に等しき者までも親族とせねばな
らないやうになりますから、之れを六親等と限つ
てあります、之れ普通人類の情義を斟酌し併せて
古來の習慣を參酌したもので最も適當だと言はね
ばなりません。

血族を直系と傍系との二つとなすことが出來ま
す。直系とは共同の祖から一直線に下降するも
ので、即ち祖父母、父母、子孫などは之れであり
ます。傍系とは共同の祖から出るのは前者と
同一ですが、一直線に下らない者で、例へば伯叔
父母、兄弟、姉妹、從兄弟、甥姪のやうな者であ
ります。

第二、偶配者

配偶者と云ひますのは、正當の結婚で生じた夫

夫婦の關係を云ひます。それで夫婦の一方は、互に他の一方を指して配偶者と云へませう。この關係は、法律で定めてある手續をせなければ、近隣の人や親族の人が夫婦と認めても、實際の夫婦とは申されません。この手續きは后で詳しく申します。戸籍上の登記をすればよいのです。人によりますと、妾を蓄へるものがありますが、我民法は一夫一婦主義でありますから、幾人妾があつても之れ等は偶配者とは云へません。

第三、姻族

婚姻に因つて夫婦の一方と其配偶者の血族との間に生ずる關係を稱して姻族と云ふのであります。即ち妻の父母兄弟は夫の姻族で、又夫の父母兄弟は妻の姻族であります。血族關係は自然的のもので姻族關係は人爲的であります。何故かと申

しますと、血統の連絡は造化自然の作用に係りますが姻族關係は婚姻と云ふ人的作用に基くからであります。

姻族は血族より見れば、親疎の度に於て自然薄いのは免がれざる所でありますから、之れを以て、舊民法のやうに血族關係と全然全一と見做すのは、餘り擴張に過ぐるの嫌があります。それで民法第七百二十五條で、姻族は三親等内と制限したのであります。

第一款、準血族

準血族と云ふのは、元血族の連絡のない者に、法律がある原因の爲めに血族と同一の親族關係を生ぜしめたものであります。又之れを、法律で定めたる血族だから法定の血族とも稱します。

(イ) 養子と養親及び其血族

養子は元來養親との間に天然の血族があるではありませんが、法律が特に血族に準じたものであります。それでありませうから、養子は縁組の日から養親の實子全様となつて、養家親族の一員となるのであります。斯に言ふ所の養子とは、養男養女を總稱しまして、養親と言ひますのは、養父養母を包含しますし、養親の血族と言ひますのは、養親の自然の血族それから準血族をも言ひます。それで養子と養親の父母とは、祖父母と孫の關係でありまして、養親の兄弟姉妹とは、伯叔父母の關係を生じ、又養親の他の養子とは、兄弟姉妹の關係を生じます。

(ロ) 繼父母と繼子

繼父母と繼子とは、天然の血縁ではありませう、父母の一方が死亡しましたか、若くば離婚に因り

まして、更に婚姻をいたしました時、實父若くば實母の配偶者と、實母若くば實父の子との關係を繼父母繼子と云ふのであります。

この繼親子の如何なるものであるやは、法律上に明かに定めてありませうから、その標準を求めののが甚だ困難であります。法律家が、親族法を研究して一番閉口するいは、この繼親子の關係であります。従つて皆さんも實地問題として、囁か困の方もあつたであります。若し左のやうな例があつたら、皆さんの考へでは如何に決定しますか。

こゝに例へば田村正雄と云ふ人があつて、おなみと云ふ婦人を妻に嫁つたとしなさい、さうしてこの夫婦間に三人の子が出来まして、長女は他に嫁に往き、次子は既に一家を創立して、三

子が未だ後に残つてゐるのです。この時母のみと云ふのは病氣で死んで、後妻としてお定と云ふ婦人を、父が娶つたとします。この場合に於て後に残つてゐる三子は、後妻お定が継子と云ふ事は出来るが、先に他家に入りし長子及次子は継子と云ふことが出来るか、皆さんは何と御考へですか、こんな問題は、實際に起ることで研究しておく必要がないでもありません。法律上では、繼父母継子の關係に就いて、明文がありませぬので、人々の判斷次第であります。が、一の原則とも言ふべきものがあります。繼親子の關係が出来るには、

(一) 繼親子が同居すること
 (二) 前婚後婚のありたること

右の要素が缺けたときには、繼父子の關係は生

じないことになりました。前の例で申せば、長子と次子は、後母たるお定と繼親子にならぬことになりませう。何故かと言ふと、(一)の場合たる前婚後婚はありますが、(二)の同居が缺けてゐます。多くの學者はさう解釋してをります。現に私が教を受けた先生と其解釋です。併し私は之れに服することは出来ないであります。貴女方も法律問題としないで、實地問題として考へて御覽なさい、右の結論によりますと變なことになるませう。現に全じ兄弟でありながら、他に往つたからとて、長子次子は継子でなく、家にある三子のみ継子だと云ふのは甚だ不條理と言はねばなりません。それで私は、この場合でも、繼父子の關係は生ずるので、此の要素はこの時には例外として解するがよいと思ひま

す。

(八) 嫡母と庶子

民法第七百二十八條に、嫡母と庶子との間に於ても亦親子間に於けると同様の親族關係を生ずるとありませす。嫡母と庶子との間柄を解し易いために例を擧げて申しませう。

甲乙の男女が私通しまして、其女に子が出来たとさは、之れを私生子と云ひませす。この時に男の方が、之れは私の産ませた子であると云つて認知届を戸籍吏に差出しますと、其子は私生子の名を變じて、こゝに庶子と言はれるのでありませす。

この嫡母と言ふ語は、常に庶子に向つて用ひるので、民法上單に母と申します時は、私生系統の母を指すことがありませすので、之れを區別する爲め

に、特に父の正妻を指して嫡母と云ひませす。

フレーベル會俳句端書集

一、課題 當季雜吟一人十句以下

一、締切 五月二十五日限り

一、披露 明治三十八年七月發行本誌文苑欄

一、賞品 天地人三座には美景を呈す

一、撰者 當分本會の撰とす

一、投稿 本誌購讀者は何人にても投稿する事を得用紙は繪葉書に限り(眞筆刷物隨意)住所氏名雅號を明記し必らず

左の名宛にて送らるべし
埼玉縣入間郡芳野村

フレーベル會俳句掛

鹽野奇零宛

第十回俳句端書集

微發の馬並びけり桃の村 東京 久米 辰子

牛嗅き小村へ出たり桃の花 同

砲車軋る柩の上や花吹雪 同

菜の花や流車に乗^{ちま}り一と丁場 同

旅順開城の早かりしか存外に尻の弱さや落椿 同

繪葉書に一句添えけり花便り 陸奥 須藤美佐子

簿着して風邪ひく春の寒さ哉 同

噓して障子しめけり梅の窓 同

戈取て汲む酒甘し桃の花 仙台 立花 せん

世は軍桃園の宴偲はれぬ 同

外塚の名残ありく芦の角 同

石垣の半ば崩れて芦の角 同

掃きかへすあとや椿の二三三 東京 平岩 學洋

元祿の風情も床し花見人 同

まだ花に早し人出の向島 同

爐塞きや壘一壘新らしき 同

旅人もまだ氣のつかず初歲 武藏 月田 一甫

白妙の不二や余寒の遠景色 同

雲雀野や笠を荷にする雨上り 同

囀りて居るや野の鳥籠の鳥 同

チ、チ、と先づ啼き初鳥雀の子 秩父 青葉 尹人

ラケット擔いだ肩や花の散る 同

暗夜や戀の眞味は知らねども 同

初戀の顔見合せぬ朧月 同

小草萌ゆる岡の彼方や人霞む 同

寺の猫佛間に妻を尋ねけり 同

雛子啼くや夕日の残る難木山 同

摘草の春となりけり紫野 豊前 金子 琴月

養ふて鉢に愛すや櫻草 同

行春の眠りさめけり雷一とつ 栃木 櫻井 閑山

坐布團を枕に春の假寝かな 越後 加藤 春陽

寒食の窓より見るや田螺とり 同

蕨野や露美しく旭の昇る 常陸 落 花 籠

菜の花や馬にゆられて頬冠り 上總 高橋 波月

水や草や恍惚として霞みけり 同

安房の山上總の丘や初霞 上野 加藤よし子

追 加

摘草や石を並べて渡る溝 無一庵 奇零

まだ早き櫻に惜しむ戻りかな 同

春風や薬師が前の飴細工 同

薄月に訪ひよる人や柳影 同

茶を立て、春惜みけり晝の雨 同

新婚の旅の戻りや春惜しむ 同

山 吹

林 天 然

雨にそぼてる山吹は

黄金玉なす許りなり

みかりくらしして丈夫が

駒をとゞめし柴の戸ゆ

みのなきこそと少女子が

花も恥らふ風情にて

語らぬ心意の優しさに

思を千々に碎さけるかな

愛國婦人會總會の記

紫波ゆかり子

四月二日第四回愛國婦人會總會を九段偕行社にて開かる、車軸を流す計りなりし昨夜の雨は、今

朝は僅に收まれり、恰も此日總會に行啓ふはしま

す

皇后陛下の御威徳に感じて數萬の會員にも満足を

與へんとすなる天の好意にもあるべし。

抑愛國婦人會は創立以來日尙淺きに拘はらず、

非常なる盛大を來せり僅々年の間にかくも擴張し

膨大して其基礎を固めし會は他に類あらざるべし

況んや婦人の團體として此の如くめざましく生長

せるものをや、こは畢竟上 兩陛下を始め奉り

各宮妃殿下のいとも厚き御庇護を受くる所以と、

下又熱血溢るゝ計りなる主唱者奥村五百子刀自、

其他各役員の一心協力の致す所なり、特に昨年の

時局に際し、總裁 閑院宮妃殿下より優渥なる御

諭旨を賜はりし後は、會員たるもの更に感奮激勵

全國の姉妹に對して本會に盡力すべき激文を發し

たり、何事を措きても國家に盡さんとするの觀念

深き我國の婦人は此舉に賛同するもの甚だ多く、

明治三十六年の末には會員三万二千人許りなりし

を一年余り經し今日にては其十倍を超過し今や三

十六万余の會員を有するに至れり、あゝ實に盛な

りと云ふべし。

式は午後一時といへど我遅れじと早朝より詰め掛

くるもの引きも切らず十二時頃にはさしにも廣き

庭園も殆ど立錫の地なく只人もて埋れぬ、豫載の

下にある會員は更なり遠國より上京せるもあり外

國婦人も數多見受けぬ、役員は大なる櫻花形に各

係りゝの文字を記せる徽章を附して人々の斡旋

を努む、例の奥村五百子刀自は撫で髮木綿黒紋付

に濃き紫紺の袴を穿ち眉間に刻まれたる黒き皺

の中に一種の威光を輝かせつゝ外國婦人を伴ひ出

で來り「外國のお客様です！はい御免なさい」と
 群集を掻き分け前の方に出入りしめさせて人々に向ひ
 「皆さんお静になさい怪我をしては大變です看護
 婦はたつた四人より居ません」と指四本をさへげ
 示しかひよくしく館の中に入れり、我の奥村刀自
 を面のあたり見しは今が始めなり、外國婦人に對
 する尊敬の念、多數會員に對する親切の心短かき
 言葉の中にも含まるゝを知れり、即此人につき
 て豫て聞知せる男まさりの氣象をも想像し得られ
 たり、國家の爲苦心慘憺經營する其心情の切なる
 あるにも感じたり。
 氣づかはれし空はやう／＼に輝き渡りぬ、午後一
 時二十分
 皇后陛下には偕行社に御着あらせらる、御馬車の
 音に會員も其れぞと知りて静まるも畏し社の階上

階下には紅白緞子の幔幕を張り続らし、庭園の正
 面なる階段には白布を敷き、其上に玉座を設け、
 御後には金屏風を立て廻らせり、別室にて御休憩
 あらせらるゝ中、金梨子地の御椅子置かるれば、
 各宮妃殿下以下貴夫人等は玉座の左方に、寺内陸
 軍大臣清浦農商務大臣等は右方に、參列せらる、
 鈴の合圖にやがて君が代を歌奏すれば、會長岩倉
 公爵夫人の御先導にて臨御あらせらる、一同最敬
 禮す見上げ奉れば玉容いと麗はしうおはしまし
 藤色地に白の花模様ある御服に同じ帽を召させら
 れ、白きシヨールに所々黒き筋あるをかけさせ給
 ふ、御椅子にも倚らせ給はで御直立遊ばさるゝを
 拜し奉るだにかしこしともかしこし。
 會長岩倉公爵夫人は静に御前の階段に立ち出で開
 會の辭を朗讀せらるれば

陛下には

令旨

本日愛國婦人會ノ總會ニ臨ミ此處ニ各員ヲ見ル
ヲ喜ブ殊ニ今回ノ時局ニ際シ本會ガ能ク救護ノ
實ヲ擧ゲツ、アルハ満足ノ至リナリ尙將來事業
ノ益々盛ナランコトヲ望ム

との優渥なる御令旨を御朗讀あらせ給へり

參列者はかたじけなさに一同頭を垂るゝのみ、已
れが後の方に年の頃五十にもやなりつらん風姿賤
しからねど極めて素樸なる様せる婦人あり、今日
の總會に參列せんとて二百余里の遠路をふりはへ
て上京しつるなりと云ふ、如何に志厚き人な
るかな、わゝ我等都のものは常にも陛下を拜し

奉る機多きをかかると田舎の人たちこそ今日を措
きて再び日の光仰ぎ見ること容易ならねば、よく
拜し奉られよとて己れが前に押し出しやりつ、
其人の喜びたとふるに物なし。

次に 裁總妃殿下御前に進ませらる、目さむる計
りなる眞紅の御服に種々の飾りある御帽を被らせ
給へれば、貴くもまた御美しくうはしますよと
見奉る人々もさゝやきぬ、やがて奉答文を御朗讀
あらせらる、これより 總裁妃殿下には有功章御
親授あらせ給ふ。

皇后陛下は此時始めて御着座まします、會務會
計の報告定款議事次第に終り後に各地よりの祝詞
祝電の報告あり、太陽の光いよ／＼輝きてさなが
ら深き御惠の露を頭上より浴するに似たり、我等
は畏さに只汗のあゆる計りなり、されどおやにく

に北風は吹き來りて 陛下の御裳の裾をヒラヒラと動かす、御咳二つ三つせき給ふ御傍に侍立せる香川皇后宮大夫の心つかひせらるゝを見るにつけてもあな 貴とあなかしこ、我等ももしもや心なき風の玉体を侵し奉らずやと心も心ならず辱うてますゝ汗に脊を沾しぬ。

先きの田舎人は拜し奉りては俯し、俯しては拜し奉り「御風召させ給ふことはあらずや」などひとりごちしいみじき感に打たれしさまにて、はては涙にかさくれたり、あはれ至慈至仁なる陛下の御徳は更なり、かゝる優しき心の人ありて眞に我國軍人の勇武絶倫なる所以なりとかつはかしこくかつは頼もしく我も覺えず感涙に咽びたり。

祝詞、祝電の中、奉天におはします閑院宮 載仁親王殿下より寄せたまへるを、堀内陸軍歩兵中佐

朗讀す意氣衝天の大聲、耳底に響き、一言一句明に聞ゆ、嘗て我女子高等師範學校生徒の爲め同中佐の「沙河の會戰」の講演を聴きつる我には其れよこれよと感更に深かりき。

かくて 陛下には 各宮如殿下を従へさせられ、君が代の奏樂中入御ましく更に樓上に成らせられ、又も親しく來會者の狀況を御覽せられぬ、普き御光を仰ぎ奉りし數万の會員の心には、一時に感喜の波動を起しつらん、かくてこそ今日此會に連りし光榮はわるなれと思ひしならん、午後三時に近き頃御けしきいとうるはしう御還啓まし

く式全く終れり。

會員は猶庭内に充溢せり、されど流石に軍國の婦人に耻ぢず、聊かの混雜もなく規律正しく狭き口より靜かに出づる様心地よし。

此日靖國神社境内及び牛ヶ淵公園内にはテントを張りて會員の溜所とし、音楽隊、大神樂等の余興あり、會員は式後此處に來り茶菓など喫しつゝ、休み見るもあり、又新宿御苑、總裁妃殿下御庭園の拜觀後樂園遊就館などの觀覽をも許されけり、はる／＼上り來りしかの婦人は如何にしつらん、郷里に歸りて定めて面目ある事なるべしなど考へ尙愛國婦人會の此後益々隆盛に赴かんことゝも希ひつゝ歸途につきぬ。

春の日影ののどかなるに大和心にとゞへらるゝ櫻の花も笑ひ初めんとする今日しも此盛大なる會に連り、まのあたり天つ日影を拜し奉り得しかしてさ狭き袂に包むに由なく、後日御盛徳の程忍び奉るよすがにもせんとかくは記しつ。

九州地方の狀況

久保やま子

五十

猶私の住居より十里貳拾里と遠ざかり肥后境の方に參りますと、殊更風俗も異なり衣服の仕立方から結髪の有様、夫れは／＼諄朴な者で穴居時代が追想致されます、併し衛生とか清潔とか申精神は殆んど皆無かと懷れます。目良山や椎葉山に參りますと、殆んど他郷人には男女の區別に苦む位、其一例は昔時と雖も此邊の婦人は眉もすらず、齒もそめず、蓬の様な頭髮を揺り被て居りますから、翁媪に至りては更に區別がないのです、衣服も隨て唯寒暑を防ぐに足るので、裏表は綴り合せし迄、袖とても筒袖でもなければ通俗の長袖でもなし、申さば手を通すに足る迄のもの、荒々しき麻布にて製して着用して居ります、背後は彼の有名の五

家莊と幾多の丘陵否山嶽を隔て、連なりて居るのです、清潔と申精神がなければ不潔が更に心鏡に映じないのも其はずですが、玄關とも申べき入口には各戸塵埃が堆積して床に垂んとして居り、三冬近寒の中と雖も蚊帳の三方を取り除きて一方のみ鴨居に釣られてあるのです、かゝる有様なれば入浴もいと稀に全身松の外皮の如く唯顔面のみ少しく人類の皮膚を露出してあるのです、然るに十八夜頃になりますと多くの男女の足のうらが清潔になるのです、嗚呼其理由は到底御理解になりますまい、それは製茶の爲です(蒸して茶を踏)まわし、如斯有様ですから餘は御了察を願ひたいのです、斯く避地になりますと教育など、申事は夢想だも及ばぬ位、皇恩は限なくて至る所の山間部落にも小學の設けはあれど、唯文字を教ゆるに止

まりて居ります、先づ二十年ほど前迄は「無山中曆日」と申様な古雅な美風も幾分存在して居たそふですが、其後は稀に他郷人が入込みて悪風を傳へ、又は片なりの小學教員や兵役満期の壯年等が舉動を誤視し、狡猪を以て伶俐となし利己主義を以て文明と懐ひ、相競ふて外形のみを繕ふ様になり、しかも唯己れ一身の爲にするのみ故に塵埃堆積したる家屋内に主人壹人白縮緬の帯を結ぶと云ふ有様、如斯年々歳々美風を去て行くのみなるは、實に残念の極です、如斯相成ますと一家計りに止りません、引て一部落一村一郡に及ばすので、今日猶日向は北海道に比せらるゝのも決して酷評ではありませぬ。土地は廣く人は稀く御座いますから、個人が働けば財政の發展は期して待つべきですが、其個人が墮落した爲め一家一村引て一縣に

及すのです、山産農産海産物等も皆他縣人に利益は吸収せられて終るのです、其原因は利己主義の人のみ多くあるため決して共同とか團體とか申風に相提携して、相扶援して事業の振興を計る事なく、相互に妨害して自滅に終るのです、かゝる弊風を治療するのは何で御座いましょう、即教育ですが、其教育の中にも分けて申せば德育だるゝと存ますのに、山間避地になりますと其德育を施すべき操行の修た教員がまづ皆無と申ても宜いほどで、目新らしき体操や唱歌で純朴な民を瞞し理科や博物で學者顔する者の多きに困るのです。或る學校長が生徒の父兄に詰問されて、御眞影に言よせて逐ひ歸したと申狂言もあると申事です、實に恐縮の至りです、未開の地に輕浮な教へを施した結果は、氣早な若者は鋤鋤を投じて唐詩を高

五十二
 吟し、紙袋を焙りて空氣の存在を喃々し、以て老爺を驚嘆せしめ、以て己れの爲すべき業を怠る格梯となすのです、故に細民は入學を厭ひ村役場の督促を免れず、聊か資産ある者は遠く他府縣に遊學せしむ、然り中學殊に其初年級時代は留學好結果を得るは稀にして、所謂世間知らずの郷里の父母兄弟を欺き、所謂「ハイカラ」となり、素行修らず、歸郷の後反て淫靡の種播きを爲す者多く、會學成り行ひ修る者は郷里の到底爲すべからざるを悟り歸り來らず、愛郷の念深く祖郷の廢頽を默視するに忍びず、歸郷事を爲さんと欲すれば彼の「ハイカラ」生に反て指彈せられ、失敗に終る、又到底破邪正を遂行する程の人傑は得て期すべきで御座いませぬ。さらば避地は未來永劫斯くして終るで有ましようか、願くは大道徳寧大慈善家大

教育家が出現し、大慈大悲心をもて疎野極まる風俗を土地と共に開墾し、もて文明の恩澤に漏るゝなく、愈々皇恩の有難きを山間幽谷の部落寒村に迄も浴させたいと夙夜熱望に堪へぬので御座います、思ふ儘を長く申しましてさぞ御座き苦しう御座いましたろふ左様なら。

流水日記

小林 雨峰

古き日記なくりひろげたる折、ゆくりなくも東奥の粗行ありたれば、反古袋に埋れ去るも難肋の情すてかたく、しるして、予が會遊のあとを追はん料としつ見ん人其の心してよ
春はくれて都は、既に、大久保の躑躅花咲くと云ふなる頃、われはまた東奥の旅客に上りぬ、遊心勃勃として、向はぬにすでに心は遠く東奥の空に向へり

愁を掃ふには旅より外にもの、具なしと嘗てより思へるわれは、今尙ほ此が爲めに身を東西に任すとのいかにこよなき樂みのこまれる、況んや再度の閑遊のそれなるは更らにうれしく、白鷗浩蕩の趣もものは、行く春の落花を趁ひ、流れゆく水にまかせて奔りゆきしは夢見る心坤すと云ふも恐よ、
途すから目に映つりし沿道の景色は、霞浦の春靄、曉より次第にたち籠めたるが、なかに人家ちらりほらりと見ゆるをかいまみて、愈々北に入れば、水戸こそまづなつかしく目に入る、仙波湖の漣波眺みて、芳草若やかに生ひ出て、東風に靡き、對岸の樹木蒼朧とし立ちならぶ、城址の牙城、今に昔の俤を宿し、義烈兩公盛時もいと思ひやらる、

常陸のはて東北の方、瀛車海岸を縫うて奔る、
 今、大甕の晩櫻は花盛りに開きて、そよ吹く風に
 ちりかかりて、結の窓を撲ちて、坐に入る風情も
 云ひ難し、かくては更らに怪松の亂濤奔波に咽ぶ
 趣き時には耳に入るなり、菜圃の黄なる、麥隴の
 青と送迎に違もなし、助川は海岸を去る僅かに十
 數間、目に入りしほどの風色のしばし厭かず、都
 人士の口に嘖々として、此の地の景色の稱へらる
 ゝも無理ならず、岸頭一帶古松梢を交へて、盤蟠
 縦横、西北の方、峯巒重疊屏の如くに遮りて、海
 波脚下に躍る。若し夫れ潮水曲灣の間に落ち來
 りて、兩崖劍の如く相擁して挾むところ、龍蛇の
 影かたまひ斗りに松の垂れ舞ふの彼方、洋々と
 して、涯なきの大洋を見るべく、人家崖腹に比べ
 る、宛としてこれ屋梁海に臥するの概ありとや云

はん、

更らに曲折幾數回、身は隧道をくゞりて、海
 を出て、は山に入り、山を出て、は海に臨みつゆ
 く間、直ちに見る、雲烟糶糊天と際なきの處、鳥影
 髣髴として掌上に來るの時、古祠其の頂に現はる、
 天姥山と云ふもそれなりしか、正午の頃、勿來の
 關址を過ぐ、古へならば、駒とめて見まほしき、
 古關の櫻花、遙かに眼を山の北方に配る、奇景に
 加ふるに、歴史の影を以てす、右に海あり、左に
 山あり、花や語らずと雖も、心々に動かざらんや、
 五分停車の短きを恨みぬ、
 浪江につきしは、午を過ぎて六時頃なり、此の
 街、大方は舊正月焼けうせたりとして新築の家、造
 作ととも、整はぬさまなり、細き流に架せる幾世
 橋を渡れば、間近に小高き陵の上に聳えたる門あ

り、石階のあやしげなるを登りゆくに、突如中程に友なる人の妻、瑞雲女史のきみ出て迎ふ、家に入りて、此夜早く寝ぬ、

去りし年の夏は原の町在なる、新田の里に住めりし友の今年はこゝに移りてなるか、風采もいと變りつ、思へは居は心を移すとの理りに漏れぬものやなど考へ來りて、夢圓かならず（五月廿七日）

早起、庭の面に出づ、こゝ小高き陵なるに加へ、古木生ひ茂りたれば夏の日の涼しさ、秋の夜の月の景色も思ひやらる、木下に憩ふて木の間がくれに彼方眺むるに、二枚三枚の田の面を隔て、西は浪江、南へかけては幾世橋、町と村とを合せて一目の下に集まり、直ちに名も知れぬ、畝くしたる青き山々を仰ぎぬ、東の方陵のつゞける端は直

ちに大平洋に接するなり、少しく陵より南東にふれて杜と杜と並びたる間々に、松の樹のぼさ／＼と見ゆるがまた朝靄にかゝりて、うつすりで見ゆるところ、狩野の繪筆もて描きたるが如し、其處は棚鹽の海岸なり、今わが憩へる處の立木は、七八百年來の榿木にて十かゝへもあるべきやうにて、枝は地を匍ふ程に垂れ擴かり、根は地上を廣く幾條にも疊み細れり、古堂前の晚櫻一株、名殘の春を留めたるもゆかしく、ゆづり葉のちら／＼と落下する始めは三葉四葉さては雨の如くなるも趣いと多し、

鐘樓の下に行みては、浪江町の火事ありしときこの樓に上りて鐘を撲つに、凄慘の狀堪えかたぐ、加ふるに風強うして夜を徹する迄止まざりしを、救済の爲めに奔走したる事、なぞ、佐々木氏の談

をき、つゝ、更らに脚を轉して、藪蔭の小路を傳ふて、相馬家の廟所に至る、路に咲ける椿、山吹の花きわだちて、目に映しぬ、苔碑幾基、風雨に暴されて、昔日の事思ひやらる、唯夫れ、椿の花、山吹の花、くる年毎に、此の墓畔に開き、開きては落り、落りてまた開く、春秋幾何を重ねやしらむ、情なき野花と云ふなかれ、心なき草木と云ふなかれ、われはこの石碑に向ふて昔を偲はんよりは、この無言の野花小草に對して生ける教訓をさくなり、

忠臣の君に捧ぐる古へ人の魂はやとりてこの野花小草に籠れるを見ずや、思へ世の人の名を知られんとしてはわせり、譽を得んとしてはもがく、人は名もなく譽なくも、人の務むべきを務むるすべあるなり、見よや、今の人、名の爲めに生ける

人の其人一たひ去りてば、其名また消え去り、譽の爲めに生ける人の其人一たびわらずなりては、其の譽また存せず人に知られずあらんとも山家の椿、藪の山吹、なき人に仕ふる心のけたかきを見ずや、不朽の命は名と譽には宿らず、朝三暮四の人に示したきは墓畔の野花なり、藪塚の小草なり、

家に入りて北座敷の陰鬱なるところに獨り物思ひに耽る、庭さきに巨石あり、相馬侯伊豆より持ち運びしものなりとか、山にあるのとは違へり、竹垣に苦いたく生へり、白髮毘布と云ふやうの襦をまとひぬ、きけばこの垣は十三年程も結び替えぬものなりとか、寂ひに寂ひ、かつや海風に暴されたる爲めと知られぬ、夜、海岸より獲来りたる防風といふものをした、かに馳走せらる、(廿八日)

朝、裏坂を下りて畑道、田甫を東へ〜と向ふ、
 願みれば與謝山より東へかけて屏風の如くうねう
 ねしたる丘陵の今や青々したる、若芽しげりにし
 げりて見ゆる、竹藪の箒のやうにぼう〜したる
 なぞ、はえ多く、田は漸く種下ろしたる斗り、中
 には早苗の芽、粟粒ほどに出てたるも交はれり、
 鳥追ふ案山子の無恰好に蹲めるも可笑し、彼方の
 杜には太鼓の音きこえ、幟なぞひら〜と翻へれ
 り、きけば今日は妙見の祭日とか、後より追ふが
 如くに來れる二人の兒守の俚歌の聲やう〜うた
 ひつゝ來るにふと耳を傾く、次第に聲は近くやが
 てしるくも左の如き聲はきこえぬ、
 なんだ太郎七豆腐は豆だ、あやめ團子は米の粉
 だ、ねーと唇上りの聲またゆかし、棚鹽の漁家三
 五、網結ふ男の子の巧みに糸をあやつるあり、濱

邊にはありかちながら、わか心を牽くと多し。
 松生ひし波打つ際に出づれば、脚もとまで渡は
 どぶん〜と來る、寄せてかへす女波男波、凝視
 すれば身は波と一つになりて消ゆるかとも思はれ
 ぬ、鹽焼く家の三角形せる茅葺きの家根の地に据
 えつけたるが如く、匍ひつくばりたるがありて煙
 も上らねば、家根の中を覗き込みたるにうすくら
 く心地もわるく鹽糟の底には別に鹽水もあらず、
 高きに登りて海洋を眺む、海ます〜濶く、空
 いや〜涯りなし、寄せてはかへす波の花ゆらり
 ゆらりと見ゆる木の葉ま帆舟、心は彌が上に爽か
 になりぬ、海限れる松原を隔て、突き出てたる、
 象の鼻の如く長く延びたるところの岬を望めば曇
 れる爲めにや、樹影おぼろ〜しく西へかけて遠
 く消ゆるが如くになり、近きあたりの山は次第に

濃く青く見え来る、こゝに古き祠あり、詣づる人のありやなしや、おはれ灣頭の古祠同行の人語るやう、この丘は東へ五十間程擴かり居りしが漸次海水の浸蝕するところとなりて、海と祠と隔たるを僅かに數尺となりぬ、自から知りてよりも既に數尺は潰飲するに至りしなりと、わゝ桑田碧海の感、豈に自然界の事のみならんや、

坂を下りて戻り途となりしに、空はいよゝ曇りて風聲薄寒を送る、顔は冷き手にて擦らるゝ様なり、兩中人は去る海灣のほとり、詩趣また多し、

(廿九日)

平和と云ふものは、夢の世界より外には求めらるべきにあらざるものか、而も世は變化多く、遷移常ならぬこそおかしけれ、夜來の小雨は強くもならずして、心も安らげく寝ねたりしが、朝まだ

き、ゴ〜と云ふ聲に驚き目さめぬれば、晴る様子\nのなきのみか、風はヒュー〜と吹きて櫂の葉バラ〜と舞ひ落ち凄まじなんぞ云ふ斗りもなし、安藤氏東京に歸ると云ふに見送りて浪江にゆく、風益つよく、帽子をシツカリと押さえて路によるめきつゝ進む、おかしき姿自からながらくる〜めぐるゴム人形の如く、漸くにして安藤氏瀛軍に乗りて歸る、また踵を返へして幾世橋に向ふ、途すがら左手に見ゆる寺の屋根を見るに船の揺ぐが如くに動き四脚門の鐘樓は揺れにゆれ、殆んど倒れん斗り、何處より吹き飛ばされ來りしものにや、茅屋根の一片ころ〜と轉げて小流の中に濡ち込みたるも可笑しくまたわはれなり、屏垣の類見る〜壊れ倒れぬ、後方を見るに砂煙渦巻きて舞ひ上り大火事の様見るが如き心地しぬ、

かかしかりしは君等幾世橋に向ひて歸途を急ぎける折、町の外に四十格恰の男の立てりしが、つか／＼と進み來りたるに、やがて佐々木氏の肩をハタと撲ち、ぐすと笑つて立ち去りぬ、元より狂人のそれにてあれば、言葉もなくして過ぎゆく、何處の者としては知るよし更らになけれど、何狂ひてか、失望の果てか、苦痛の爲めか、遺傳か、特發か、親の爲めか、妻の爲めか、原因はしらねども、不幸なる男の子の身の上深き経路は盡きがたきもの籠れるものあらん、

寓に歸ればこの大風の最中に小高の町、火を失して大方焼け失せ、負傷者、即死者など多く出てたりとの噂(卅日)

京に歸る心急がる、出て立ちてまた東西南北の人となる春風暖を送ると雖、落花また心を動かす

もの多く、旅情綿々として盡さざるものあり、(五月一日)



東京の手鞠歌

龍東生

左に記せるは、東京市内に於て、現今流行せる手鞠歌の
一なりき。而してその曲は、女子が唱へる傍にて、勿卒の間に予
が作りしものにて、少し如何はしきふしの無きにしもあらざれど
その大体に於ては大差あるまじと思へり。もしたはぬ所あらば、
そは讀者にてよきなに計らひてよ。

2.
4. 5 5 5. 3 | 5 5 | 5. 5. 5. 3 | 5 5
(一) ム カ ヲ ト ル | ホ サ ン | マ キ イ ッ チ ヨ | シ ン ジ ヨ

5. 5 5. 5 | 1 6 5 5 ||
ヒ ト マ キ ナ ン ト コ ソ

(二) 5 3 3 | 5 5 3 3 | 5 4 | 5 5 5
ニ ハ モ | シ ン ジ ヨ | レ シ ヤ ニ ハ | ハ カ ヌ

5. 5 5. 5 | 1 6 5 5 | 5. 5 5. 5 | 1 6 5 5
ニ ハ ハ キ | ホ ヲ ズ ハ | ニ ハ ハ イ テ | マ リ コ ソ

5. 5 5. 3 | 5. 5 5. 4 | 5. 3 5. 3 |
ソ シ ヤ ニ ハ | ハ カ ヌ ト | マ タ デ ン グ

5 5 5 ||
カ ヘ ス

(三) 以下(二) = 同シ

手鞠歌

(一) 一向通るは坊さん、まき一ちよ進上、一まき何
とこそ。

(二) 二はも進上、俺にははかぬ、庭はき坊主は、庭
はいてまりこそ、俺にははかぬと、又でんぐり

返へす。

(三) 三はも進上、俺産しない、身持女は産してまり
こそ俺さんしないと、又でんぐり返へす。

(四) 四はも進上、俺鹽賣らぬ、鹽屋さんが鹽賣つて
毬こそ俺賣らぬと、又でんぐり返へす。

(五) 五はも進上、俺どばう賣らぬ、八百屋さんは何
とこそ、どばう賣つて毬こそ俺どばう賣らぬと

又でんぐり返へす。

(六) 六はも進上、俺ろをこがぬ、船頭さんは何でこ
そ、ろをこいで毬こそ俺ろをこがぬと、又でん

ぐり返へす。

(七)七はも進上、俺質をかぬ、貧乏人は何とこそ、質をいて愁こそ、俺質をかぬと又でんぐり返へす。

(八)八はも進上、俺恥か、ぬ、乞食はなんとこそ、恥かいて愁こそ、俺恥か、ぬと、又でんぐり返へす。

へす。

(九)九はも進上、俺鍛持たぬ、百姓は何とこそ、鍛もて愁こそ、俺鍛持たぬと、又でんぐり返へす。

(一〇)十はも進上、俺字は書かぬ、學者は何でこそ、字書いて愁こそ、俺字か、ぬと、又でんぐり返へす。

紀州の手毬歌。

(一)竹三本々々々、高野の山へ、竹三本、雉よ鷹よ明日は殿御のお廻じや、何着てお廻じや、子供し

ゆの金袴黄色に染めて 菊の花十六 十六の娘が紙屋へ嫁入つて 紙三帖貰うて、てゝに一帖は

ゝに一帖 一帖の紙を ぎじや〜とささむで 舐の穴へおしこみへしこみしたら 鬼が三匹で、きて 其鬼のいふことにや 機からな(からねば) 出てけ(出て行け)糸とらなで、け鬼がころ〜ス ットン〜。

(二)鶯え〜 梅の小枝へ晝ねして 晝ねの御夢に

なんと見た ゆーべ呼んだ花嫁御 奥の座しきへ座らして 金欄鍔子を縫はすれば ほーろ〜となきやんす 何かなして(悲しくて)泣きやんす わーしや所の千松は 三ツや四ツで金堀りに金やないやら 死んだやら 一年待つても状や来ず、二年待つても状やこず 三年目に状や来て 其状の上はかきは、小万に來いと言ふ状で、小ま

んは、中々やれません、今日小女郎をやるほどに
かー飯三杯汁四杯 豆腐蒟蒻さんにやをにや。

保育者のため

幼稚園に於ける自然研究(一)

平山 ひさ

これは前掲幼稚園の遊戯と同じく「幼稚園の理論
及實際」と申す書の一部で、自然研究と題され
て居る項の抜萃でございます。

○幼児は風にゆらぐ枝やそよよと動く木の葉で
飾られた絶えず青い物のある庭園に置くがよろし
い。こういう處では幼児が平和に幸福に健全に發
達して、周圍にある物から力ある静かな感化を受
けるので、幼児は自然といふ廣大な書物を手にし
つゝ凡ての生物の生命に向つて同情を表する様に

なる。凡そ困難な生活、うるさい人生には薔薇の
香や、森の中の静かさや、松の緑などが、得も言
はれぬ深き慰藉を與へるものであるが、併し何人
も此世を捨て、しまつて自然をのみ友とするとい
ふ事はできぬから、自然の方を吾々人類の方に引
き寄せ近づけるといふ事は誠にあらまほしい事だ
ゝある。それには幼い時から「自然」と親ませる必
要がある。

○自然研究と一口に言ふ中でも、地質學、結晶學
鑛物學などに屬する事柄と動物學や植物學ほどに
幼児に對して興味を惹き起すものではない。それ
は鑛物などには生命といふものがないから、幼児
が自分の生命にひき比べて興味を有つ愛するとい
ふ事がないからなので、幼児は主に生命を有つて
居る生き物即ち動植物を愛するものである。併し

そうであるからと言つて動植物以外の自然物や自然現象を全く度外視して顧みぬといふ風ではよろしくない。雪が降れば雪の研究をする、蒸氣を見之に付て考へる、といふ様に時に當つて幼児と共に之を考へ之を説明するは必ずしも無用の事ではない。否むしろ教ふべき時に教へ、考へるべき時に考へる良い事である。但し之等は偶然出會した時にすべき事柄なので、幼稚園に於ての自然研究といふ中では動物と植物とが主位を占めるべきである。

○幼児の自然研究といふ事に付ては、最初に、自然に對する幼児の興味を惹き起し、第二に、自然に由て幼児の心情を訓練し發達せしむるといふのが最大要件なので、之に由て知識を増すといふ事は第三位に置してよろし。一休知るといふ事は

それはど價のある事ではないのである。

○兒童期に於ては、万物を愛する様にならせればそれでよいので之で十分である。自然を研究して其中から科學的に眞理を發見するといふ事は大人になつてから永い根強い研究を要するので、人間の幼少な間は、只自然に向つて熱心に愛するといふ心情さへあれば澤山なので、之に引きつゝいて考も知識も出て來るのである。

○幼児に自然を教へるには單に其物の形態に付て數多く教へようと望むには及ばぬ。あまり多く見せると幼児の頭の中で混雜する恐があるから、少しばかりをしかと見せて、自然に對する思想の根本を養うて置くがよろしい。そうするとたとひ幼少の間は自然に對する知識が狭くとも、養はれた根本の思想が基になつて、年長するほど知識が廣

まつて行くものである。

○動植物に手や足があつたり物を言うたりする様は大人が話す幼兒はそれを眞に受ける、それらの生物にも心ありとして考へる。といふ事は随分をかしい事ではあるが、併し幼兒にはまづこゝいふ方面から入れてよいので、何にもせよ自然に對する愛を養うてさへ置けば、之が萌芽となつて段々自然を尊敬し且つ之と親しむ様になつて來る。

○自然を愛するといふ事を一の仕事の様に思はせてはならぬ。幼兒として自然といふ空氣の中に在らしめ自ら之を親愛する様に仕向ける事が必要なので、故意に注入する強ひるといふ風では却つてよろしくなす。

讀書の朶

露國 日本 魂 雄 樋口勘次郎著

日本魂雄といふ男の子が、明治八年樺太千島交換の頃陸中の南部で生れて、小學校を卒業し、大津の中學に學び更に士官學校を卒業して、立派な軍人になつて、遂に今回の戦争に出て、所々の戦役に參加するといふ仕組にして、其間に今度の日露の戦争の由來、樺太交換から、大津事件、遼東半島還附等のことを、魂雄が、或は學校の先生に學んだり或は自分で見聞したりした様に書き下してさて、本題に這入つてからは、直接自ら戦争にたづさわつた様に書き下して、陸軍海軍等一切の出來事を面白く報導して居る、其間には、廣瀬中佐

も出て来れば、マカロフ中將も顯はれる、彼我の
勇將猛士の寫眞も鮮明に顯はされる。中には魂雄
君や其他の名士の軍歌が曲譜附きで出て来る、戦
争の談になると、細かな地圖で兩軍の形勢を指示
する、といふ具合、すべて魂雄君の自叙傳にして、
子供に今度の戦争を知らせる爲に分り易く讀ませ
様といふ仕組で、まことに結構に出来て居る、紙
數は百八十四頁代價は四十錢これで以て、日露戦
争の由來から奉天大會戰に至るまで順序正しく面
白く分るのであるから時節柄送り物なぞには面白
からう。

會 報

第十總會 先月廿一日(金曜日)フレール氏誕生
の日を以て本會第十總會を附屬幼稚園に開きたり

開會に先たつて、來會せられたる會員も非常に多
く、やがて一時半開會を報ずるや、場内殆んど立
錐の地なきまでの盛會にて、實に二百數十名を數
ふるに至りたり。

始に高嶺會長は立ちて、開會の辭と併せて將來の
希望にて演述せられ(本號掲載)次に松本文學士
の保育上兒童の個性に關する注意に付きて詳述
せられ、(次號掲載)夫より會務の報告に移り、次
きて中村主幹は「フレール氏の最初の學校に付
きて」といふ題にて、其當時の状況を述べられ、
終に會員東基吉君は「フレール先生の臨終」
と題して、先生の臨終當時の有様を朗讀せられた
り。

之にて一段落となり、次に下令嬢の巧妙なる琴曲
の調あり、會員の唱歌合唱(隱岐の院、花)あり、

夫より園遊に移り、來會者は、園内に設けられたる紅茶店、菓子店、酢子店等に立ち依りて思ひく
 に休息せらるゝあり、或は、輪投げを試みるあり、
 或は室内のピンポンに技を争ひあり、而して此間
 天賞堂より出張せられたる蓄音器は、絶えず場の
 一方に微妙の樂を奏せるあり、時恰も希なる快晴
 の日にて、春風和氣胎蕩、眞に愉快の會合たりと
 尙、當日東京保姆養成所より金四圓貳十錢寄附せ
 られたり、謹しみて厚意を謝す。

幹事選舉の結果左の如し。

- | | | | |
|-----|-------|-----|--------|
| 三八點 | 下田たつ君 | 一〇點 | 田邊 春君 |
| 二八點 | 平山ひさ君 | 一〇點 | 岩井ちとせ君 |
| 二一點 | 大橋いぬ君 | 九點 | 千葉 秀君 |
| 一五點 | 田中ふさ君 | 七點 | 東 基吉君 |
| 一〇點 | 山下つや君 | 七點 | 佐藤 梅君 |
- 右當選者
- 右次點者

入 會

仙臺市東四番町六〇、	入 會	六十六
長崎縣師範學校附屬幼稚園	右波佐谷みち紹介	嶺 ぶき
長崎市立袋町幼稚園	杉野かくよ	
東京市麹町區元園町一ノ五〇、	右東もと紹介	
東京市下谷區入谷町一四三、	澤 坂・本 なる	
女子高等師範學校附屬幼稚園	右鈴木ゆき紹介	
東京市本郷町曙町一六、	岩井ちとせ	
山梨縣南都留郡谷村	西村とめ	
神奈川縣鎌倉郡腰越小兒保育園	杉野四男次郎	
東京市神田區表神保町一、一橋幼稚園	清 原 與八郎	
	右雨森劍紹介	
	澤 右武井綱枝紹介	

會費領收

金額	年 月 日	姓 名
七〇	三七、九	神田 順子
五〇	三六、一	東 基 吉
六〇	三八、四	伊東 國 三
一〇〇	三七、一〇	阿 部 長 泰
一〇〇	三七、七	關 泰
一〇〇	三七、七	小 林 泰
一〇〇	三七、二	小 野 泰
一〇〇	三六、二	江 原 泰
八〇	三八、五	早 川 泰
三〇	三八、四	坂 本 泰

自明治三十八年三月廿七日
 至同 四月廿五日

四〇〇 二〇〇 一五〇 一〇〇 五〇〇 六〇〇 四〇〇 二〇〇 一〇〇 五〇〇

三八、一——三八、四
 三八、四——三八、九
 三八、五——三八、九
 三七、四——三八、三
 三八、四——三八、三
 三八、五——三八、八
 三八、二——三八、六
 三八、一——三八、六
 三八、二——三八、八
 三八、三——三八、八
 三八、四——三八、八
 三六、九——三八、五
 三八、二——三九、一
 三八、一——三八、四
 三七、二——三八、四

吉野かゝる
 岩井ちとせ
 西村さだ
 横田けい
 和田くら
 杉野四男次郎
 松浦さしな
 入田さだ
 久米たつ
 原ちか
 櫻川か
 山口保三郎
 山北保三郎
 北村いと
 田邊はる

保育法夏期講習會豫告

本會は來る七月中に於て幼稚園
 保姆のために夏期講習會を開く。
 時日、場所、學科及講師等其詳細は
 來月の本誌上に廣告すべし。

明治卅八年五月

フレール會

一冊の本でどんな種類も残らず知る事が出来る本は此筆記録

東京遊戯法研究会講師 伴 茂 樹 先生講演
東京府師範學校遊戯擔任 中 川 濟 編
東京遊戯法研究会講師 有 久 龍 一 編
教授界主幹

學校遊戯法講習會筆記録 全 家庭遊戯法講習會筆記録 全

東京市内公私立小學三百二十三校既に採用實施
定價金參拾五錢 郵稅金四錢

本會第二回講習會の二科として學校家庭遊戯法を開講茲に終了を告げ筆記録も亦完結す其講習せし「國定小學讀本唱歌集」に據り「國定歌遊び」として、其他「表情競技、行進、室内、弄球、舞蹈」等新案のもの八十餘種、悉く兩講師が實地兒童に試み、改訂又改訂せらるる諸注意談を漏らす筆記し、此筆記録を繕くものは座ながら實際に講習を受くるが如く、獨り活舞臺と變ずるならあれば、此筆記録機邊に舞蹈を演じ、或は行進或は表情、識らずく書齊は活舞臺と變ずるなら職にあるもの保育の中心たる遊戯を究めんとするものは乞ふ本書を繙かれよ愉絶!!!快絶!!!

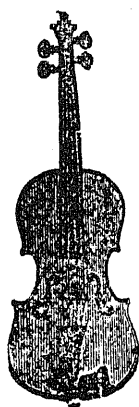
讀めば直ぐに兒童が傍で踊り出すことの出来る本は此筆記録

發行所 東京市四丁目 麴町二十番地 飯町二丁目 田町 研成會

●洋琴 金參百圓以上貳千圓迄各種

●ウイオリン

鈴木製金五圓以上五拾圓迄各種
 舶來品金八圓以上百五拾圓迄各種



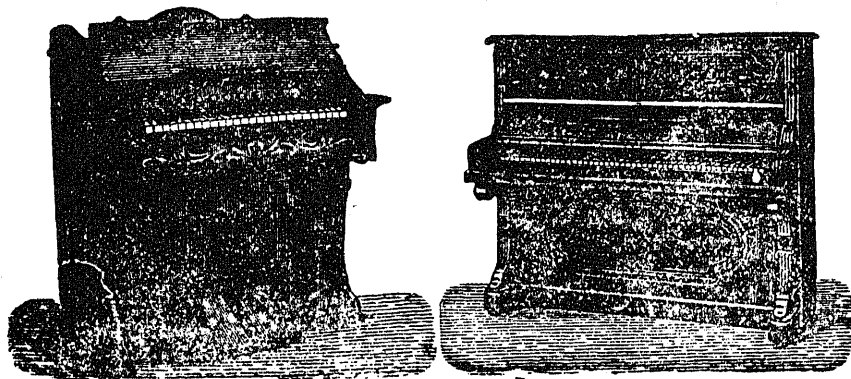
●手風琴

附 險 保
 琴 風 葉 山

全一	全二	メ一	式一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一
號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號
形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形
金貳拾圓	金拾圓	金拾圓	金拾圓	金拾圓	金拾圓	金拾圓	金拾圓	金拾圓	金拾圓	金拾圓	金拾圓	金拾圓	金拾圓
以上	以上	以上	以上	以上	以上	以上	以上	以上	以上	以上	以上	以上	以上

(寸要を費造荷)

●右の外兩用風琴、吹奏琴ハーモニカ、フラジオール、ト其他各樂器
 并に和洋音樂書各樂器附屬品各種



新 刊 廣 告

●東京音樂學校編纂
 ●中學唱歌 油製全一册定價金三洋珍十五錢郵稅四錢

●小山作之助編
 ●重音唱歌集 定價金五拾九錢 郵稅不要

●山田源一郎編
 ●女學唱歌 第一集 定價金五拾九錢 郵稅不要

●美本第二集
 ●女學唱歌 第二集 定價金六拾五錢 郵稅不要

●共益商社編
 ●幼稚園唱歌 第一集 定價金四拾錢 郵稅不要

●島崎赤太郎編
 ●オルガン教則本 全一册定價金四拾錢 郵稅不要

●洋裝大形美本
 ●遊戲 一之卷定價金三拾五錢 郵稅六錢
 二之卷定價金五拾錢 郵稅八錢
 三之卷近刊

●鈴木米次郎編
 ●音樂新遊戲 定價金三拾錢 郵稅不要

●石原重雄著
 ●小學唱歌教授法 定價金三拾五錢 郵稅不要

●北村美全一册
 ●勸進帳 定價金三拾五錢 郵稅不要

●鈴木米次郎編
 ●舞蹈案內附舞蹈曲 定價金七拾五錢 郵稅不要

●洋裝美本全一册
 ●目錄進呈 定價金七拾五錢 郵稅不要

●ヒヤン
 ●調律修繕 郵券二錢 御送附

明治三十四年二月六日內務省許可
 明治三十四年一月廿八日第三種郵便物